鬼の棲む家

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼の棲む家

【Ｎコード】
Ｎ８２９９Ｊ

【作者名】
たまさ。

【あらすじ】
首切り役人と、一人の娘の物語。ある藩の家人の娘として産まれた雪花だったが、彼女が十二の年、父親が罪人として処断される。苦界へと売られようとしている雪花の前に立ったのは「山田浅右衛門嘉弘――おまえの父を殺した男だ」と名乗った。嘉弘と雪花の背中合わせの物語。

注意書き

この物語は、ベースに「山田浅右衛門」という実在した人物（団体）がおります。

ですが、この話はまったくのフィクションです。
ベースにはしていますが、その史実とはまったくの無関係であります。
実在の団体うんたらは関係なく、ある種時代物ファンタジーとしてお楽しみ頂けたらと思います。

この物語の軸である「雪花」という名前も、どちらかといえば「ナイ」名前になると思います。
そこはあえて「武家の娘で雪花って、芸者や源氏名じゃあるまいし」な感じでつけております。

そして山田君ですが、ヨシヒロにしろキチジ（ヨシトキ）にしろ「他の漢字」を使わせていただきました。

ですので「似てるけどまったくの他人」ということで処理させてもらいたいと思います。

尚、この物語は漢字が多くつかわれ、なおかつ不親切にルビもあまり使われておりません。
あえてそのように致しました。
更に、内容にかなり現代では適切ではないのではないかという表現があります。
流れを損なわないようにと書いてありますが、不快な思いをされるかたがいるやもしれません。

（身体的特徴などのことです）

それでもどうか、誰かの心に届きますように。

ルビが少ないので一応以下、人物紹介。

雪花（ゆきはな）

本編の主人公になります。

山田浅右衛門嘉弘（やまだあそうえもんよしひろ）

首切り役人（ただし幕臣ではなく、身分はあくまで素浪人）

吉次（キチジ）

先々代の山田浅右衛門。

（史実では吉時（ヨシトキ）実際は吉寛が８つの頃に亡くなっている）

有村藤吉（ありむらとうきち）

山田の道場の師範の一人。

注意書き（後書き）

ご理解をいただき、お付き合い頂けたらと思います。
イロイロ注意書きを書きましたが、楽しんでいただけたらと思います。

始

木枯らしが冷たく耳に触れた。
感情はどこで落としてきたのか、どこか空々しく、冷たい。
判っていることと言えば、それまでの生活はすべて失われたのだということ。

江戸にある藩の組屋敷に暮らしていたそれまでの生活は、砂塵（さじん）のごとく崩れ去り、差し向けられた眼差しはどこまでも冷たいものとなった。

――おまえが殺されないのは、慈悲なのだ。

ほんの数日前まで、顔を見せればやわらかく微笑み、いつまでも幼子をあやすようにその大きな手で頭を撫でてくれた久遠様の固い口調。父の登城に付き従っていた下男が、労わるようなそぶりで雪花を苦界へと売ろうとするのも、他に術が無いのだと、身寄りの無い子供を、誰も抱えることなどできないのだと。
向けられる冷たさに、もう気力すらない。

母が死に、父が死んだ。

それまでの生活は失われ、十二才の子供には成す術などありはしない。
涙は枯れた。
下男が何を思ったか、売り物にしようという小娘の衣類すら剥ぎ取ろうとしたところで――心は動こうとしない。
もうこのまま死んでしまっても……
ぐいっと着物の襟首を開かれ、酒臭い息が掛かる。恐怖すらわかぬ

心の前に、ふいに、奇妙なものが入り込む。

「ひ、ひぃっっっ」

泡粒を飛ばして、下男の手が襟首から外された。

突き飛ばされ、そのまま背後に尻をつく。まるで鏡面のように、反対側にいる下男も同じ様に地面に尻をついた。

その間に、刀――

ぎらりと冷たい白銀の光。二人の間を割るように現れたそれに、下男はぎゃあと悲鳴をあげた。

――殺されるのかな。

雪花は無表情にそれを眺めた。

刀の冷たい刀身を見つめたのは二度目だ。否、かりにも武家の娘だ。父の手入れするそれを幾度も見たことがある。

だが、殺されると思うのは、二度目。

しかし、その刀はするりと空を切り、男の腰の鞘に収まった。

静かな、静かな所作。

がたがたと震える下男などものともせず、男は静かに地面に尻をついて自らをぼんやりと見つめる雪花を見た。

「――雪花」

名を呼ばれた。

何故、名を知っているのだろうか？

それとも、知っている人だったろうか？

小首をかしげた。

みあげる相手はまだ二十代になったばかりか、もしかしたらそれよりも若い。武士ではないのか、その髪は髷を結わず、ただ頭の高い場所で一つに結ばれている。浪人という風情の男だ。

知らない、人。

雪花はそう判断した。

少なくとも、父のいた藩の人間ではない。目つきが鋭く、何か奇

妙な香りがした――香だ。男だというのに香を焚きしめているなんて、雪花は奇妙だと思った。
「おまえは今日から俺の屋敷で暮らせ」
静かな言葉。
その言葉に、下男が思い出すように口をはさもうとしたが男はそれを冷たい一瞥で黙らせた。
雪花は男の言葉に眉間に皺を刻んだ。
この男は知らないのだろうか？
――誰も雪花と関わろうなどという酔狂はおこさなかった。仲の良かった隣屋敷の人間も、口約束だけだったとはいえ、婚約者という間柄だった千葉の家も。
罪人の……――
「俺の名は山田浅右衛門嘉弘（やまだあそうえもんよしひろ）。
――おまえの父親を殺した男だ」
凪いだ心が、ざわめいた。

1

その屋敷があるのは千住平河町――浪人という身分でありながら、その屋敷の広さはこの辺りでも類をみない。

敷地内には母屋と道場、離れと先々代の趣味という茶室、それと幾つかの蔵を所有していた。

雪花が十二の時から四年と半年暮らしているのは、その屋敷の離れに当たる一番奥にある小さな平屋だった。母屋からは渡り廊下で繋がってはいるものの、その廊下を渡ってやってくるものといえばこの屋敷の下女下男を束ねている中年女のミノ。この屋敷で長く仕えているミノは、四十に手が届くかというころあいの女で貫禄のある体つきをしている女丈夫だ。

同じ敷地内に多くの門下生を持つ道場が作られているというのに、奥まった場所にある離れはとても静かなものだ。

雪花は雪見窓の横、ほんのりと入る日差しの優しさに時々ぼんやりとしながら手元の羽織に針を刺した。

黒い羽織の胸と背には柊紋（ひいらぎもん）――この屋敷の主の家紋だ。

それを一刺し一刺し繰りながら、雪花はただ静かに考える。

この屋敷に引き取られた意味は、実は未だによく判らない。嘉弘はその理由を口にはしなかったし、雪花自身尋ねたりもしていない。そもそも、この屋敷に来て一言も雪花は口を利いたことが無い。

胸にあるのは奇妙な感情だ。

――山田浅右衛門（やまだあさうえもん）。

かの男は「父親を殺した男」だと名乗った。それを聞いた時に湧き上がった感情は、憎しみなのか何なのか、今もって雪花には判らない。

嫌悪か、憎悪か。

なににしろ、それまでの冷え切ったものが払拭され、雪花は感情を取り戻した。どうとでもなれというものは無い。ただ、自分はその男を見返した。
　誰からも要らないといわれた身だ。
罪人の娘として――忌まわしいものとして冷たくあしらわれた身だ。
それをかの男は自らの屋敷に住まわせた。
　その意図もわからなければ、こうして住んでいる自らの意図も判らない。
……時々、殺したいという思いが沸き立つ気もする。
　そしてまた、どこか自分の中で冷静な部分が笑うのだ。

――父は罪人として首切り役人に切られたのだから、仕様の無いことではないか。
雪花は、四年を過ぎた今もその思いを消化することができないのだ。
　こうして暮らしている自分をあざ笑う自分。父を殺した憎い男を利用しているのだという自分。いつか殺してやるのだと叫ぶ自分。
父は自業自得なのだと泣く自分。
雪花は、感情を取り戻してなお、自らを失っているような気がして落ち着かないのだった。
　ぴくっと指先が動いた。
考えに没頭しすぎてか、銀の針が雪花の指先を突き、その肌からぷくりと血の玉を溢れさせた。
「……」
　痛いという言葉も出ない。
もう四年半の間言葉を喋らずにいた癖か、咄嗟にも声は喉を振るわせようとはしない。本当に声は失われてしまったのかもしれない。
そう思ったところで、雪花はわざわざ声を出そうとは思わなかった。
――はじめは、意地だったのだ。
　父を殺した男と話などしたくない。
その屋敷に身をおいているというのに、頑なに雪花は口を噤んだ。

だがそれは、周りの人間達にすんなりと「口無し」なのだろうという認識を与えてしまった。
喋らなくて良いのだと思えば、雪花はどこか安堵してそのまま放置した。
喋りたくない。
喋らなくて良い。
ここは、鬼の住処(すみか)なのだから。
雪花は自らの心をもてあましながら、四年と半分の歳月を過ごしていた。
血の玉をそっと口にふくみ、吸い上げる。
決して旨いとはいえない奇妙な味が口の中に広がり、吐息を落とす。
唇を離すと、またうっすらと血がにじんだ。それを今度は舌先だけで舐める。裁縫箱の中にあるハギレでしばらく抑えると、やっと血は止まった。

羽織に血がつかぬようにと注意したのだが、ふとそんな行為も実はばからしいのではないかと苦笑がこぼれた。
この羽織は山田浅右衛門の――将軍家に献上される刀の試し切りの為に罪人の首を落とす、首切り浅の羽織。この先いくらでも血を吸うのだから。
誰と会話するでなく、せん無い事を考える。
それはとても不毛だと――実は自分でも気づいている。
大きく息を吐き出し、ふと渡り廊下に音を拾う。廊下をこするように歩くのはミノの癖で、癖といわずともそこを歩むのはミノしかいない。
すっと障子の前に影が落ち、居住まいを正して開かれる。

「雪花さん、身支度を」
その言葉に、雪花は眦を二度震わせた。ちらりと外の様子をうかがったのは、未だ明るい為だ。

彼女が身支度を命じるのは当主の帰宅を示す言葉で、屋敷の人間の多くが門前で彼を迎え入れる。それは先代からの習いで、今は道場で門下の指南をしている先々代の吉次などは「武家でもあるまいに阿呆らしい」と笑う。だがミノは「当然のこと」として形を大事にするのだ。

雪花は手元の羽織を一旦軽く畳み、裁縫道具と共に棚へと戻した。彼女が来るのは先触れが到着してすぐのことだが、身支度といったところで何をするわけではない。ただちらりと鏡を見て、そのまま部屋を出る。

今日は早い。

ならば直に戻るということで、酒も女も袖にしたのだろう。仕事がある日は決まって郭で憂さを晴らすような男だ。早い帰宅は仕事が無いことを示す。

雪花は気分を滅入らせた。

この四日程、帰宅することが無かったものだからなんとなく今日も戻らないのだろうと思っていた。ある月などは一月の間戻らぬこともあった――あれは幕臣の誰かを暗殺しようとした一味がつかまり、その一族郎党の処刑に追われていた為で、おそらく相当鬱屈が溜まっているのだとミノなどは訳知り顔で言っていたし、吉次の後ろでやんわりと微笑んでいる有村藤吉（ありむらとうきち）は「当代はそれ程ヤワではないと思いますがね」と苦笑していた。

そのどれでも構わない。

帰宅するなら帰宅するでもう少し事前に知らせてもらえれば、心の準備ができるというのに。

雪花が表玄関口にたどり着くと、そこにはすでに道場の門下生と屋敷の女中が控えていた。

前を歩いていたミノが正面に座し、雪花が玄関の上がりかまちに斜めに座る。丁度正面の門が開かれ、しばらくすると籠が邸内に運ばれた。

ゆっくりと籠が側面を向いて地面に下ろされ、門下の一人が履物を

揃える。それにあわせて籠屋が垂れ幕を跳ね上げると、黒衣の羽織と袴姿の男がゆっくりとした動作で地面におりた。
脇差の大小を左手に持ち、そのまま玄関から入ってくる。
人々が頭を下げるなか、ミノは晴れがましいというように明るい口調で「おかえりなさいませ、旦那様」と迎え入れた。
雪花は着物の裾を伸ばすようにして指先を隠し、両手を捧げて頭を垂れる。それにあわせてその手の上にずしりと重い大小の刀が置かれた。
柊紋の鍔を持つ艶やかな刀は先代の形見の品。
代替わりのおりに将軍家から刀を下賜されているものの、普段それは使われることもなく桐の箱に収められているという。
ずしりと重いそれを押し頂き、雪花は伏せた瞳の下でふわりと香がくゆるのを感じた。
幼い頃に不思議だったそれは、ただの匂いけしだと今は知っている。こびりついて離れない死臭を消す――ただそれだけの品。
嘉弘(よしひろ)の後をミノが歩き、その後を雪花が続く。ミノは四日ぶりの主の帰還が嬉しいのか、しきりと話しかけているが相手からは時々相槌が戻るだけだ。
玄関から離れると、背後のほうでほっと息をつく気配を感じる。
――彼らもまた、怖いのだ。
当代の持つあの雰囲気が。彼の刃が振り下ろされるのは罪人だけだと決まっているというのに、幕府によって人を殺すことを許されたその存在をどうしても畏怖してしまう。
雪花などはそれが不思議で仕方ない。
所詮(しょせん)、皆おなじではないか。
門下の者も人を殺すための術を学び、その臓腑がどんな薬になるかを学んでいる。罪人の臓腑は薬として卸されるのだから、この屋敷の人間はどのみち――みな鬼でしかない。
雪花の父も罪人として嘉弘に屠られ、その臓腑は薬として売り払

われたに違いなく、その骨はどこかの無縁仏として捨てられたのだ。
　そう思うと失われそうな殺意がわく。
――自分はきっと、いつかこの男を殺す為にここにいるのだ。
　雪花はただ静かな眼差しで、黒い背中を眺めた。
途端、ぴたりと前を行く背が止まり、雪花は危うくその背にぶつかりそうになった。
慌てて足を止めると、すっと嘉弘がゆっくりと振り返り、口の端を上げた。
「――」
言葉はない。
ただ、唇を引き結ぶようにして笑い、雪花を視界に捕らえ。そしてゆっくりと顔を戻して歩む。
　雪花は我知らず腕の中の大小を抱いた。
――何を考えているのか理解できない。
ただ、雪花は背中に冷水を浴びたような気持ちで唇を噛んだ。

2

母屋の一番奥に当たるのが嘉弘(よしひろ)の部屋だ。
床の間にはミノの趣味で季節の花を描いた掛け軸がつるされ、刀置きが置かれている。雪花は持っていた刀をそっとそこにかけ、着替えをしている嘉弘とそれを手伝うミノに頭を下げて部屋を辞した。
言われずとも、この後に続くのは酒だ。
嘉弘は大酒のみではないが、帰宅すればすぐに酒を飲む習慣があり、その後には風呂と決まっている。今ごろは下男が風呂を沸かせているだろうし、飯炊き女が夕餉の仕度、ついでに酒の肴の準備に追われているだろう。

雪花は厨(くりや)へと向かい、暖簾だけがさげられたそこに顔を出した。
熱燗の香りがぷんと鼻をつく、そして米のぐつぐつという音。中では馴染みの飯炊き女のはなと共に、見知らぬ男が談笑していた。
「ああ、雪花さん。熱燗はもう少しまって頂戴」
はなが菜ばしを手に雪花に言う。雪花はこくりとうなずきながら、食器棚から酒の猪口と幾つかの皿などを漆塗りの膳に並べる。
「あれ、随分と可愛らしい嬢さんがいるもんだ」
男は突飛な声で言う。
「およしよ六さん」
はなが苦笑するが、男は続けた。
「おれはぼてふりの六ってもんさ、あんたは？」
「およしったら」
雪花は話し掛けられても答えることができない。いや、できるのだろうが、口を利かずに四年と半分。今更口を利こうなどと思わない。
だから眉に皺を寄せて相手を見やるしかできず、男は不快そうにケッと舌を鳴らした。

「なんだいなんだい、お高く止まってやがんな。
俺みたいな男にゃ声もかけられねぇって？」
「おやめったら！　雪花さんは口が利けないんだよっ」
慌てたはなの言葉に、ろく――六蔵は拍子抜けしたように瞳を瞬いたが、やがて「へぇ」と口にした。
「すまないね、雪花さん」
困ったように言うはなに、雪花はなんでもないことだと首を振り、だが六蔵は何を思ったかニヤニヤと口元を緩めた。
「ああ、あんたが噂の口の利けないお妾さんってヤツだな」
さすがにこの言葉にはなは青ざめた。
――口の利けない妾、それはこの屋敷の女中達が雪花のいない場で彼女を言い表す言葉で、六蔵にそれを告げたのは誰でないはなだ。
「ばっ」
慌てたはなだったが、雪花は静かに出来上がった熱燗を膳に乗せ、用意されていた酒の肴と共にそれを引き取った。
「口が利けないどころか、耳も駄目なんじゃねぇの？」
と六蔵があけすけに言うが、雪花はそれすら気にしない。はなはどうしたらよいものかと雪花と六蔵とを見比べていたが、雪花はさっさとそんな厨房を後にした。
厨ではなの怒声が聞こえてきたが――そんな陰口、この数年で慣れてしまった。
ミノだとてあからさまに雪花に当たることもある。
この屋敷に来た当初などは、せっつくように「なんで旦那様がお引取りにならなけりゃならないんです？　罪人の娘なんて……まったく、おやさしい限りですが、この先いくらだってそんな子供は出るんですよ？　どっかに奉公にでもだしちまえばいいんですよ」
幾度もそんなことを言われたが、嘉弘は何も言わなかった。
そもそも、彼が雪花を引き取ったのは優しさなのだろうか？
罪悪感？　それとも、哀れでも催したのだろうか。

自らが切った男の子供が、苦界に売れるのを哀れんだ？
――何故、なんて問うこともできずにただ時だけが流れる。
　そのうちにミノなどは諦めた様子だが……いまだもって雪花の立ち位置は理解できるものでは無い。

酒をもって嘉弘の部屋へと訪れると、すでにその居住まいは着流しになり中庭を見る為にか、縁側で片膝をたて、もう片方の足は軽く曲げて内股につくような状態。背は障子の縁に預けている始末だ。
　雪花はそんな相手の前に膳をおき、一礼した。
そのまま部屋を去ろうとしたのだが、珍しく嘉弘は庭先に向けていた視線をつっと雪花へとめぐらせ、猪口を手にぐっと雪花へとむけた。

「……」
注げ、というのだろうか。
雪花は眉をひそませ、だが静かに膳に用意した手ぬぐいで熱い徳利を掴むとその猪口に酒を落とす。
　嘉弘は小鉢の中の一つである塩をもう片方でつまみ、猪口の縁をなぞるようにおくとそれをくっと呑んだ。
――この呑み方は奇妙だと思う。いつも思うのだが、熱燗ならば枡酒（ますざけ）にでもすれば良いと思うのだが、この男は決まって小さな猪口で飲むのだ。
「雪花」
名まで呼ばれた。
ますますいつもと違う。
雪花は小首をかしげた。
「おまえに良いものをくれてやろう」
男の低い言葉に雪花は瞳を瞬く。
猪口を膳に戻し、嘉弘（よしひろ）はすっと自らの横に置かれた桐の箱を引き抜いた。

確かにそこに置かれていたが、まさかそれが自分宛だとは思わなかった雪花は少し驚いた。
桐の箱は細長く、何も書かれていない。中央を綺麗な組紐で結ばれた品だ。
雪花はおそるおそる手を伸ばし、その紐を解いた。
かたりと音をさせて出てきたものは、綺麗な金と銀とで花を描いた包みだ。細長い包みは見事な造りをしている。さらにそれを紐解いて現れたのは、懐剣。
漆塗りの鞘に収まった鍔の無い短い剣。
どくりと心臓が音をさせた。
「使い方は判るな？」
嘉弘は静かに言うが、雪花は手の中のずしりとくる重みに意味が判らない。
「どう使うかはおまえしだいだ」
――どういう意味？
問いかけようと口が動いたが、言葉を忘れた喉はからからに嗄れたように音を発しない。
「下がれ」
嘉弘は短く命じた。
その一言で全てを遮断し、嘉弘は自ら酒を注いで視線を中庭へと向けた。
まるで、雪花などその場にすらいないかのように。

3

かたりと音をさせて桐の箱を開き、中から絹地の包みを取り出す。それまでものに対しての執着を、雪花は抱いたことは無い。何しろ雪花は何一つ自分のものというものを持っていない。

山田浅右衛門（やまだあそうえもん）の屋敷、その一番奥の離れに暮らしてはいるが、この部屋に置かれる全てのものが雪花にとってどこかよそ事にうつるのだ。

自分に不釣合いな着物の数々。季節の巡りに新しく用意される簪（かんざし）の数々。

それらは全て嘉弘（よしひろ）が命じたものだというが、それが事実かどうかも知らぬ。ただ、ミノがそうしているだけなのかもしれない。

季節が変わるたび現れる衣料商、簪職人。それらは全て十四の頃、雪花に月の物が訪れてからミノが手配しだしたものだ。彼女の無言の圧力が、雪花には判る。

――嘉弘の妾としての意義を、彼女は雪花に求めているのだ。

女中でも下女でもなく、ただ屋敷にいる女ではなく、嘉弘の為に存在しろと示す。

だが、それは彼女の勝手であって嘉弘の意向ではない。

すくなくとも、雪花は嘉弘がそんなものを自分に求めていないことくらい――判るつもりだ。

今まで与えられつづけたもののなか、唯一この手の中の懐剣が、何故か自分のものとして意識できた。

冷たい輝きと、刀身を持つ懐剣が、雪花の中で安堵を与える。

昼過ぎの自室、雪花はぼんやりとそれを膝の上に載せて、見つめた。

あれから五日程の日が流れはしたが、不思議と屋敷の主は毎日のよ

うに帰宅するようになった。
　そして、酌を求めるのだ。
何があの男をかえたのか判らない。ミノは毎日帰宅する主に機嫌を良くするが、雪花としてはなんだか疲れてしまう。
　ふと、雪花は物音に顔をあげた。
渡り廊下を歩む足音。
だが、それは床を撫でるように歩くミノのそれではない。まるで忍ばすようにそっとそっと、けれど時々キシリと床板が音をさせる。
　そうするとその足音の主はぴくりといったん動きを止めるのだ。

――誰？

雪花は怪訝に眉をひそめて顔をあげた。
　持ってい懐剣を慌しく棚へと戻す。
咄嗟のことに、絹地の包みにいれるのもままならない。
誰が来るのか知らぬが、何故だかその懐剣を誰かに見られるのはいやだったのだ。
　障子に影が差す。
途端、タンっと音をさせて開いたその姿に――雪花は硬直した。
喉の奥で音が凍りつく。
　何故？
なんだか心臓を握られたような奇怪な気持ちになり、ついで不快に眉をひそめた。
立っていたのは男で、それは以前厨で見かけた男だ。

「よぉ、お嬢ちゃん」
こんな場に何の用だろうか？

雪花は厳しい視線を向けたが、男はにやにやとしながら室内をぐるりと見回した。

「なんだ、結構質素な部屋だな」
ずかずかと入り込む男に、雪花はどうすれば相手が出て行くのか考える。言葉を出せばよいのだろうが、こんなことで口を開くなど馬鹿らしい。
だが、そんな雪花の様子を面白そうに見ていた男は、ずかずかと足を進め、雪花の腕を掴んだ。
ぎりっとつかみ上げられ顔を顰める。
「そう怖い顔すんなよ？
なぁに、ほんのちっとだけ――な？」
へへへとにやつく男の手が、雪花の尻をなで上げた。
その時になってやっと相手の意図を感じ雪花は逃げようともがいたが、だんっと背中が棚へと打ちつけられた。
ぐっと喉の奥でくぐもった音が漏れた。
棚の上のものがいくつか床に散らばる。
雪花は押さえ込まれ、耳朶に男の酒臭い息を感じた。
まるで犬のように荒い息を繰り返し、ねっとりとした舌先が首筋をなで上げる。悲鳴をあげようと口を開いたが、しかし四年以上話さずにいた喉は音を忘れたように声を発しない。
もがいても男の力は衰えず、ずるずると雪花の腰は床に落ちた。
のしかかる男の手が雪花の袂から入り込み、そのざらりとした感触が地肌に触れた時、雪花は卒倒しそうになった。
じたばたと暴れる雪花に痺れを切らすように六蔵の手が飛ぶ。
「生娘じゃあるまいに、おとなしくしやがれっ」
ばしりと叩かれて顔が無理に左へと向けられた。雪花はくらりと意識を手放しかけた。
――いっそ意識を手放してしまいたい。
肩口を押さえ込まれ、床に崩れる。
六蔵の手が、雪花の着物の袂を割るように浸入してくる。
目の前に畳の目があり、雪花はあえぐように視線をめぐらせた。
棚から落ちたものが視界に入り、必死で手を伸ばす。

男の手が襦袢をもどかしげにたくしあげていく。雪花は落ちた懐剣を引き抜いた。

4

悲鳴をあげたのは、雪花ではなく六蔵だった。
「や、やりゃあがったな、小娘！」
ばっと散った赤い血が、雪花の顔をぬらした。
引き抜いたままの勢いで、雪花がその懐剣をひるがえし男の腕を切ったのだ。

男の瞳が血走る。勢いのままにもう片方の手を伸ばし、雪花の懐剣を取り上げようとするから、雪花は必死にそうはさせるまいと身をよじった。
　床に背を預けた雪花はどうしても不利な状態で、必死に抵抗する。だが手負いの獣はその怒りのままに雪花へと害意を膨らす。
「小娘ぇぇぇっ」
雪花の手にある懐剣が、そのまま男の力も加わり雪花を傷つけるのは時間の問題だった。
ぎりぎりと押しあう刀が小刻みに震える。
　六蔵がさらに力を加えようとしたところで、がんっという音と共に縁側の障子が開かれ、雪駄の足が畳を踏みつけた。
「わしの居合切りをその身に受けるか、下郎！」
低い恫喝声は、この屋敷の道場で指南する山田浅右衛門吉次（やまだあさうえもんきちじ）――先々代の隠居のものだった。
「ひ、ひぃっ」
六蔵が悲鳴をあげて腰を落とす。

咄嗟に腰が抜けた男の胴に、鞘に入れたままの刀で吉次は力任せになぎ払う。男の体が容易く左へと投げ飛ばされ、あとからやってきた門下生達によって取り押さえられる。
　雪花はくたりと体の力を抜かした。

「雪花や、無事か？」
先ほどの威圧など微塵も見せず、吉次は身を伏して雪花に問い掛ける。その時には吉次の右腕である有村藤吉の手が雪花の腕の下へと入り、体を支えた。
「雪花さん？　どこか怪我は？」
いつもは飄々とした様子の有村が真摯に尋ねてくる。雪花は大きく喘ぐように酸素を求めながら、怪我は無いという意思表示に首をゆるゆると振った。
力を失った雪花のかわりのように、有村の手が雪花の着物を整える。それを一瞥し、吉次は取り押さえられた男の方へと足を向けた。
「おまえ、どんな目的で雪花を襲った？」
低く恫喝。
門下生に腕を捻じ曲げられ、顔を床につけるようにしながら六蔵は泣き笑いの声で答えた。
「ほ、ほんの少しばかりの……悪戯心で」
「ほぅ？」
「あっしは、あっしは悪くありやせんっ」
蔑むような吉次の様子に、六蔵は慌てて声を張り上げた。
「あっしはっ、そっちの娘さんに誘われただけでやんすっ」
其の言葉に雪花は驚愕して身じろぎした。
有村が不快に顔をしかめ、雪花の体を起こすように支える。
「へ、へへへへ、ちょっとした火遊びじゃあないですか」
雪花は体をこわばらせ、ぎゅっと有村の袖口を掴んだ。
身が震える。
何か、何か――弁解の言葉を。
引きつれる喉を動かそうとすれば、有村がぽんっと雪花の肩を優しく叩いた。

「その下衆を連れていけ。
そうだな、二番蔵にでもくくっとけ。今ごろ良いものが見れるじゃろ」
冷たく言い放ち、まるで犬でも追い払うように手を振る。
それからぐるりと室内の惨状を見回し、吉次は肩をすくめた。
「平気か、雪花？」
やっと上半身を安定させれば、雪花はこくこくとうなずく。
苦笑するように吉次は口元をゆがめ、自らの着物の袖口で雪花の顔をぬぐった。飛んだ血で汚れた顔に、慈愛をこめて。
「すぐに畳も障子もかえさせような。今宵は母屋にでも床をおとり」
好々爺の様相で言う吉次に、有村が顔を顰める。
「まさかさっきの男をそのまま放置するつもりじゃありませんね？」
「二番蔵で反省させたのちはここの主殿が処断するだろ」
二番蔵という言葉に有村が肩をすくめる。
「まぁ、素人には十分反省になりますでしょうがね」
意味ありげな様子に、雪花が回答を求めようと有村を見れば、有村は苦笑した。
「いや……今ですね、二番蔵で医者の方々が……いえ、失礼。なんでもありません」
女子供に言う言葉ではないと、慌てて有村が言葉を濁したが雪花とて相手の意味することは理解した。
――腑分(ふわ)けをしている、のだろう。
罪人として処断された遺骸を、医術の発展の為に医師たちが時々開いて学んでいるというのは知っている。それが良いことであるか悪いことであるのか、はなはだ雪花も判らない。
ただ断罪された死体の所有権は全て山田浅右衛門にある。その遺骸を腑分けしたいと医師からの要請があれば幾ばくかの金額でもってそれの段取りもつける。そして内臓器を医薬品として取扱い、販売するのもまた山田浅右衛門の専売だった。

武士ではないただの浪人としての扱いながら、山田浅右衛門は並みの武門よりも裕福だといわれる所以である。
その石高は三万石。雪花などにはとうてい理解できるものではない。
その時になってやっと慌ててミノが現れ、雪花はミノによって風呂場へと連れ出された。
「何事もなくてようございました」
一人で風呂に入るのも心細いだろうと、ミノは雪花の風呂に付き合った。
「それにしても、まったくなんて男だろう！　この屋敷が山田浅右衛門の屋敷だと知らぬわけじゃなし！」
ぶつぶつと文句を言うミノに構わず、雪花は眉をひそめてせっせと自らの首筋、触れられた胸や足を丹念に何度も何度もこすり洗った。
赤くなるのも構わずに、何度も何度も。
ただひたすらに気持ち悪かった。
それを痛ましいというように見つめ、ミノは大きく息をついた。
「雪花さん」
ふいにミノの声の調子が変わる。
「こんなことがあった後で言うのもなんだけれど――」
雪花は振り返りミノを見た。
「今夜あたり……」
其の言葉にかぶせるように、慌てたような女中の声が浴室に入り込む。
「ミノさん、雪花さんっ、旦那様がお帰りですっ」
「ああ、はい。はいっ、今出ますよっ」
ミノは慌ててざぶりと湯船から立ち上がり、雪花は体の汚れを湯桶で流した。
「雪花さん、あんたはいいよ。髪だってまだ濡れているしね。身支度が済んだら旦那様に顔だけはおだしよ？」
ミノは溜息交じりに微笑んだ。

5

良い、といわれた言葉に素直に従い、雪花は十分風呂で体を洗い、温め、気を落ち着かせてから浴室を出た。
　脱衣所に置かれている着物が変わっていることに気づく。
それは明らかに雪花の着物ではなく、質は良いものの少し古い着物。首をかしげはしたものの、他に着替えるものもないのでとりあえずそれをきちんと着込み、濡れた髪を軽く結い上げて櫛で止める。そうして浴室を離れれば、いつもよりなんだか慌しい様子に眉を寄せ、それでも一度自室に行かねばと重い足を離れへと向けた。

――が、離れのほうがもっと慌(あわただ)しかった。
「ああ、雪花さん」
下女が雪花に気づいて軽く手を出して押し留める。
「離れは今駄目です。畳をはがしたり障子をとったりしてもらってますから。
母屋のほうの空き部屋をとりあえずは使うようにって」
言いながら、雪花の二の腕をぽんっと叩くようにしてむきを変える。
「詳しいことは旦那様にお聞きください」
ミノではなく旦那様？
雪花は眉間に皺を刻んだが、ミノに聞くよりも確かに主がいうことのほうが良いのだろうと雪花はそのまま主の部屋へと足を向けた。
　雪花は主の部屋の障子の前で座り、こつこつと床を二度叩いた。
「入れ」
すでに着流しに酒といういつもの様相となった嘉弘は気だるい口調で応え、雪花は障子の下に手を添え、二度に分けて開いた。

　頭を下げれば主は視線を外へと向けたまま、
「懐剣で狼藉者の腕を切ったそうだな」

突然そういわれ、雪花は下げた頭を半ばで留めた。
「生ぬるい」
――？
「人を切るというのはおまえに何をもたらした？
ためらいは無かったか？　血は騒いだか？　息の根を止めようとは思わなかったか？」
珍しく饒舌な主は、猪口の酒をくいっと飲み干し、ふっと口元に笑みを浮かべた。
「来い、雪花」
酌をせよというのか。
雪花は立ち上がり縁側に座る主の近くに座り、ぐっと手首をつかまれて崩れるようにその肩口に額をぶつけた。
慌てて身を離そうとしても、男の手が雪花の手首を掴み抑える。
「血は、おまえをかえはしなかったか？」
「――」
まるで挑発的に唇を歪めて言う男を睨み、雪花は息を詰めた。
顔が、近い――

「俺は人を切ると、血が滾（たぎ）る。
おまえは？――何も感じなかったか？」
唇が触れるほど近くで、その吐息が雪花の唇で水滴になるほどに近くで、男はまるで酔うように語る。
雪花はその距離から逃れるようにとらわれていない手を床につけて身を突っぱねる。
「あの程度で腰を抜かすようでは」
クッと喉の奥が鳴った。
「俺を殺そうなどと夢のまた夢だ」
「！！」
雪花は心臓を掴まれたように息をつめ、楽しそうに間近から自分を見つめる瞳を凝視した。

まるで闇のように深い……瞳。
つかまれていた腕が、突き放すように外された。
その勢いに背後に弾かれる。
何が楽しいのか、嘉弘は喉の奥を鳴らして笑い、視線を庭へと向けた。
「離れのものは全て処分する。
ミノに命じてある。着物も飾りも全てだ。しばらくは母屋に部屋を用意させる。足りないものは明日揃えさせる。今日はもう休め」
下がれ、と命じられた。
雪花は自分の胸元を抑えながら、ハッと息をつく。
「……」
話したくない。
けれど、けれど。
雪花は絞るように、枯れ果てた声をやっとの思いで口にした。
「か……」
一音が、掠れた。
けれど言わなければならない。

掠れる声に、喉が痛む。
怪訝に嘉弘は眉間に皺を寄せて雪花を見た。
喉が痛むのは言葉を使わなかった代償だ。雪花はそれでも言わなければならないと判断した。
無礼を承知で、盆の上にある猪口の酒へと手を伸ばし、喉へと流す。
一旦留めたのは過ちで、途端にそこが焼け付くような気を味わった。
できればうがいしたいが、一息に飲んだ。
「か……ん」
必死に言葉にすると、やっと音は口をついた。
少し喉に絡む気もすれば、また自らの声としてどこか違和感もある。
雪花の知る自分の声といえば、もっと高いものだったと思うのに……
必死に言葉を、落とす。

幾度かからみ、その音程さえも慣れぬ口がやっと言葉を吐き出すのには苦労した。
「懐剣も、処分、なさるのですか？」
雪花の言葉をはじめて聞いたであろう主は、一瞬瞳を見開いたがすぐにふっと鼻で笑った。
「そのように命じた」
「あれは、いや、です」
「いいや。あれも処分する」
「あれはっ」
声を必死にあげる雪花に、嘉弘（よしひろ）は笑う。
「他人の血を吸った剣などで切られてやりたくはない」
「……」
悔しそうに息を詰めた雪花に、ふと嘉弘は口の端をゆがめた。
「――手入れを済まして戻せばよいな？」
「……旦那、さま？」
「開きたく無い口すら開いて望んだものならば、無下にするのも忍びない」
それがおまえの望みなら、と続け、嘉弘は顎で外を示した。
「下がれ」
雪花は深く頭を下げ、部屋を辞した。

雪花には判らない……
闇色のあの男の心が。

6

雪花が自室である離れに居を戻したのは、一週間の後のこと。畳も全て張り替え、障子も新しくなり、何より驚いたのは室内にあった全ての調度品がまったく違うものに変えられていたことだ。

ミノに「今日からは離れに戻れますよ」と言われ案内された先、箪笥も火鉢もその全てが新しいものだ。

あっけにとられる雪花に、ミノは溜息交じりに笑う。

「旦那様のお言いつけですべて交換させました。まったく、雪花さまにはお甘いのだから、あの方は」

甘い……？

その言葉に違和感がある。

雪花はこそりと首を傾げた。

「まぁ、これを機会に雪花さんには考えて欲しいのですけれどね」と、ミノは意味ありげに笑うととんっと新しい畳の表面を叩いた。

「おすわりください」

――このしぐさはここにきた当初に良く見られたことだ。

説教……？

びくびくと着物の膝に手をかけて座ると、やけに機嫌の良い声音でミノが言う。

「最近は旦那様がきちんと毎日帰宅してくださいますし、雪花さんとも仲睦ましい様子でこのミノも安堵しております」

……仲、睦ましい？

ものすごい疑問が。

雪花が曖昧な笑みを浮かべていると、ミノはにっこりと微笑んだ。

「そこで、ミノとしてはそろそろ旦那様には後継ぎ様をお作りして欲しいと思っているのですよ」

まるで素晴らしいことを打ち明けるように言われた。
「まぁ、勿論祝言が先だということは判ってはいるつもりですけれど……」
それは勿論そうだろう。
「なんといっても旦那様はミノの言葉など少しも聞き入れてくださる方ではありません」
そこで、
「ここは一つ雪花さんに頑張って頂きたいのです」
「――」
雪花はさぁっと自らの血の気がひくのを感じた。

まさか、もしやと思ってはいたが。
ミノは物凄い野望、というか無謀なことを考えているのか？
「雪花さんももう十分お子を成せる年ですし、ここは一つ大恩ある旦那様に報いる為にも」
たんっ、とミノは膝をうった。
「今宵あたり閨を共にして頂きたいのです」
「……」
声を上げなかったのは呆気に取られすぎたからだし、わざわざ声を出すのはやはり面倒だと考えているし、何より長年の慣れだ。
雪花は蒼白になった。
まるきり楽しそうに言葉を続けるミノを、まるで言葉の通じぬなにかのように見つめながら、心持首を振ってみる。だが、だが――ミノは自分の考えがさも素晴らしいという様子で上機嫌だ。

「雪花さんは武家のお嬢さんだし、旦那様はあの通り素晴らしい方です。きっと可愛らしく賢い素晴らしいやや子さまが産まれることでしょう」
ふるふるふるふる……
武家って、すでに失脚していますし。あの通り素晴らしいって、

どこがどのあたりで素晴らしいのか雪花にはちっとも判らないです。
死臭を隠す為に香を焚きしめる男のどこを示して素晴らしいというのか……雪花には、雪花には判りません。
雪花は必死にいやだと首をふるのだが、ミノの心はすでにやや子を腕に抱いている夢想にふけっていた。

「ああ、新床のお作法をお伝えしなければなりませんね」
ミノははたりと現実にたちかえったが、その現実はどこまでも夢に近い。
「大丈夫ですよ。雪花さんは何の心配もいりません。
旦那様がお休みになられる前に寝間で三つ指をついて頭をさげて、あとは旦那様のなさるように。逆らってはいけませんよ？　怖いことはありません。旦那様はおやさしい方ですからね」
……その夢からどうぞ帰ってきてほしい。
雪花はぎゅっと着物の膝を掴んだ。
「あら、雪花さん、顔色が悪いですね。
床に行く前にはきちんとお風呂に入りましょうね。体の隅々までしっかりと磨かなくては」
――雪花はすでに逃れられない運命に、そっと自らの胸の下、帯に刺さる懐剣に救いを求めるように手を這わせた。
そして、ふと気づく。
この剣の意味に。

6（後書き）

さて、雪花さんにがんばっていただきましょう。
うちの山田君はほっとくと動かないからね。

7（前書き）

この回には多少大人な表現が含まれております。ご注意下さい。

7

機嫌の良いミノは主が帰宅した後も機嫌が良かった。
雪花には酒の酌のあとには風呂へと入るようにとしっかりと念を押し、さらに駄目押しのように風呂につかる雪花を見にも来た。
随分と早い時間から嘉弘（よしひろ）の床は用意され、単だけの雪花はそこで暗くなるまで放置される。
厚みのある敷布団の下、雪花は懐剣をそこに潜ませた。
抜き出しやすいようにと袋から出し、柄の部分を外側に向け、枕と敷布団の下に。
心臓がとくとくと早鐘を打つ。

どちらかというと緊張というか、もう気持ちが悪い。
時の流れに、今ごろ嘉弘は夕餉をすませたころあいだろうかとか、風呂をあびたあとであろうかとか――無駄なことを考える。
そもそも、何故自分はミノの言葉でこんな場所にいるのかだとか、もう頭はぐちゃぐちゃだ。
――本気で自分は嘉弘を殺したいのだろうか。
それを考えなければいけないのに、考えたくないと拒絶する。
父を殺した男だと嘉弘は言う。それを憎んだ気持ちは無いとは言わない。父の罪がどんなものであるのか、雪花には判らない。当時は本当に小娘で、そんなことは感知するすべもなく、ただあの日……父が、すまないと、言葉を、落とし……――

たんっと襖が開き、雪花はハッと息を呑み、慌てて三つ指をついて頭を下げた。
「……なにを、している？」
低く恫喝的な言葉で嘉弘は言葉を切った。
嘉弘自身、寝巻きである浴衣。肩に手ぬぐいをかけた様子は明らか

に風呂上りの様相。
じろじろと雪花の様子を眺め、顔をしかめ、そして息をつく。
「ミノか」
ちっと舌打ちのように言う。
だがすぐにつかつかと雪花の前に立つと、乱暴な所作で――普段からやけに綺麗に動くこの男にしては乱暴な所作で、どさりと胡座をかいた。
三つ指をついたまま頭を垂れる雪花の頤(おとがい)に手をかけ、ぐっともちあげる。
視線が、かちあう。
まるで獣のような力ある瞳に、雪花はこくりと喉を鳴らした。
「震えているぞ」
言われてはじめて気づく。確かに、小さく、体が振動する。
「無理強いするつもりは無いが、ここにいるという時点で了承ととるからな」
言葉と同時に唇が触れ合う。

そのまま押されてとさりと布団の上に転がされる。上半身だけを布団に預けたまま、雪花の視界に薄暗い天井が入り込んだ。
風呂上りのどこか湿った体温が自らの上にのしかかる。触れ合う唇から酸素も唾液も抜き取られるような感触に、体のどこかが痺れたように意識が飛ばされる。
唇の間から吐息が漏れ、雪花は羞恥に意識を取り戻した。左手をそっと動かし、布団の下、固い懐剣の柄に触れると、雪花は勢いをつけてそれを引き抜き、自らの上にいる男へと向けた。
くっ、と――嘉弘の瞳が嬉しそうに笑う。
容易く雪花の左手を絡めとり、拮抗(きっこう)させるように力をこめる。
くくくくくっと喉の奥を鳴らしながら、そのままの状態で嘉弘は雪花の首筋を舐めあげた。

まるで何事でもないというようにそのまま行為をつづけていく。
左手を押さえ込んだまま、膝で雪花の足を割り、舌先で、歯でもって単の胸を広げていく。
「うっ……」
おそらく嘉弘は容易く雪花の懐剣を奪えるであろうに、そうはしない。ただ手首を押さえ込み、もう片方の手で帯を紐解く。
ひんやりとした空気が肌を刺した。
嘉弘は実に楽しそうに笑い、唇を歪め、あらわになった胸元に舌を這わせて胸の突起を口に含んだ。
「あ……」
「良いぞ、雪花――俺を殺してみろ」
その言葉にぐっと手に力をこめる。だが下半身がぞくぞくとあわ立ち力が入らない。するりと、左手の懐剣が手元を離れ、落ちた。
途端にその懐剣を嘉弘は掴み上げ、雪花の胸元にその刃を当てた。
「あぁッ――」
つっと赤い線が生み出される。深く切られた訳ではない。ただほんの少しだけ、すっと、切られた。
その血を、嘉弘の舌が舐める。
瞳が爛々と輝き、口元に笑みを浮かべ、嘉弘はその剣を雪花の首の脇に刺した。
雪花の瞳が大きく見開かれる。
殺されるという恐怖が身を襲った。
それと同時に、それは仕方が無いことなのだという思いが産まれる。
刃を向けるとは、そういうことなのだ。
刃を向ければ殺し、殺される。そういうものなのだ、と理屈抜きで体に染み込む。
嘉弘は自らの浴衣の帯を解いた――
口の端を歪め、笑い、雪花の体を折るように、抱いた。

8（前書き）

ぷちいやんな表現あり。

8

――殺してみせろ。
幾度も幾度も其の身を貫きながら、嘉弘は雪花の耳元で囁いた。
「この俺を、殺してみせろ。雪花」
まるで楽しげに、嬉しげに、うっとりと。

雪花はぼんやりと瞼を震わせ、日の光に朝を感じた。
天井を見れば離れのそれではなくて、主の寝間のそれだとうつろに気づく。生暖かい手ぬぐいで、ふと首筋をぬぐわれた。
「起こしてしまいましたね」
ミノは困惑の混じった声で言う。横に視線を向けると、ミノは枕辺で優しい眼差しを雪花に向けた。
「旦那様はもう出仕なさいましたよ。ああ、雪花さんは良いのですよ。今日はゆっくりと養生なさったほうがよろしい」
「……」
生きてる？
雪花は霞む頭でそんなことを思う。殺されてしまうのではないかと思ったのに。だというのに、生きている。
ただ体のあちこちが痛んで、あちらこちらがきしきしと悲鳴をあげている。
顔をしかめる雪花に、ミノも顔をしかめる。
「雪花さまははじめてなのだから、もう少し優しくしてさしあげればよいのに」
どうやら主への文句のようだが、雪花はそれ以前にミノの口調のやわらかさと――そしてその雪花さま、という聴き慣れぬ尊称に首をかしげた。
しかし相手は勿論気づかぬ調子で続ける。
「湯殿の準備はできていますけれど、体を動かすのはおつらいです

か？」

其の言葉にじっくりと自分の体を思う。
昨夜は酷く触られ、舐めまわされたことを思い出し、体の痛みうんぬんよりも風呂に入りたい。この不快感を洗い落としてしまいたいと切に感じ、雪花は身をゆっくりと起こした。
体に掛けられた布団が落ちれば、いくつもの痣を持つ白い裸身があらわになる。
――噛み付かれたことも思い出した。
ミノは一瞬ぽかんと口をあけたが、慌てたように雪花の肩に単を掛ける。
「まったく旦那様ときたら！」
小さな声での罵りは、ミノらしくない口調だ。

雪花に手を添えて立たせると、雪花はその感触にうろたえた。
内股を、とろりとした体液が流れて落ちる。
わざわざ単を合わせてやろうとしていたミノは一瞬天井を見上げ、身を伏せて手ぬぐいで雪花の下又を流れたものをぬぐった。
なんとなく、かぁっと雪花の顔が赤く染まる。
なに、なに？　なんなの？
「ぬぐってしまうのはもったいのうございましょうが、流れ出たものは駄目なのだと昔産婆も言ってましたしね？」
明らかに呆れたような調子だ。
意味が判らず首をかしげてみせる雪花に、ミノは苦笑交じりに、
「子種でございますよ」
と――さらりと言う。
さらりと言われても雪花にとってはそれはそれは衝撃なのだが。
「たんと子種を頂けたのですから、早くやや子が産まれるとよろしいですね」
ちっとも……よろしくない。

――ひどく他人事に響いた。

9

嘉弘(よしひろ)の寝間を整え直したからそこで休めと言われたが、雪花はそればかりは完全に拒絶し、自らの離れに引きこもった。

体の痛みを逃すようにぺたりと縁側にすわり、温かな日差しを受ける。ミノが共にいようとしたが、ぐいぐいと追い立てた。

「そんなにてれずとも」

と、ミノは勘違いをして忍びわらっていたが、ただたんに今は誰とも会いたくないだけだ。

下半身が痛いし、体全体がだるい。

先ほどミノが用意した薬湯をゆっくりと飲みながら、雪花は嘆息した。

時がたつに連れて、だんだんと嘉弘に対して腹がたってきた。ミノもミノだ。なんだか色々なものに対して腹がたつ。

むかむかとして唇を尖らせ、嘉弘が帰宅したならば絶対にこの口を開いて文句の一つもぶつけてやろう。

雪花はむくむくと怒りを育てていたのだが――其の日はおろか、五日の間、主は帰宅しなかった。

ミノははじめのうちこそ雪花を労わるようにしていたのだが、だんだんと雪花に当たるような態度を取り出した。

そうすると雪花を放置するようになり、むしろ雪花としては気が楽だったのだが。

「雪花さんがですか？」

金花堂の饅頭を持って茶にしようと訪れた吉次と有村藤吉を前に、雪花は指文字でもって指南を受けたいと伝えた。

言葉を喋ろうとは思わない。

それは怠慢なのか億劫さなのか、雪花自身わからない感情によるものだ。
　こくりとうなずく雪花に、有村は瞳を何度も瞬く。
「えっと……何故？」
理由を尋ねる有村と違い、吉次は一旦は驚いたものの微笑んだ。
――剣術を、覚えたいのです。
「そうじゃな、またいつ無頼なものが現れるか知らぬ」
「御前、ですがあんなことは滅多にありませんでしょうに。ここは山田浅右衛門の屋敷なのですよ」
「そうおもっとったからこそ、馬鹿がやすやすと入り込んだのじゃないのかい？
雪花だとて元は武家の娘だ。薙刀（なぎなた）なんぞはわしらにとって門外漢じゃが、なに剣ならばいくらでも教えてやれる」
好々爺の顔で言いながら、吉次は雪花の手に触れる。
むにむにと手のひらを押すようにしながら、苦笑した。
「武芸の手とは程遠いのぉ」
そういわれると恥ずかしい。
「ではの、有村」
「はい」
「これからは午後は雪花を鍛えてやってくれ。
まぁ、はじめは体力を作るところからかの。ほほほ、わしも随分と親切じゃのう、有村？
優しいと思わんか、有村？　感謝したくなろう？　有村？　のぅ？」
　意味ありげにしつこく言われ、有村は苦笑し、顔を顰めた。

「なんですかその言い方」
「桃源堂のあんこは絶品だぞ」
「上野は近いからいいですけれど……」
有村は嘆息したが、すぐに雪花へと視線をめぐらせてにこりと微笑んだ。

「ということで雪花さん、明日私は上野に行かされるようなのですが、ご一緒にいかがですか？　歩く、というのも大事な鍛錬ですよ」
「うおっ、何気におまえ手が早いなぁ」
「御前、茶化すと怒りますよ？　夕餉に椎茸だしますよ？」
にこにこしながら有村に言われ、吉次はぶるりと身を震わせた。
「椎茸は駄目じゃぁ……」
ぶつぶつという吉次を無視し、もう一度うながすように言われたが、雪花は困惑にそっと小さく首振った。
外に……――実はここを訪れてからというもの、外に出たことは無い。
外に出なくとも何の不自由もなく過ごせたし、何より――外は、恐ろしい。そういうイメージが身を竦ませる。
罪人の娘として冷たい眼差しと言葉とを投げつけられた日々を、体が、覚えているのだ。有村の優しい眼差しがじっと見つめ、微笑む。
「怖いことはありませんよ。
私もこれでこの家では師範の一人として生きている身ですしね。あなた一人を守るのに不足があるとは思いません」
強く言われ、雪花はちらりと吉次へと視線を向け、握られたままの手を軽く叩き、慣れた指文字で問い掛けた。
――出て、良いのでしょうか？
すると吉次が苦笑する。
「嘉弘が出るなと命じたか？」
ふるりと首を振る。
嘉弘はそんなことは何も言っていない。
ただここから出なかったのは自分の意志だ。
「では、いってごらん。
まだ春先も春先、冷たい風ばりで櫻の花も咲かぬがの、蕾は膨らんどるから、きっとうっすらと櫻色を感じるじゃろう。散歩に上野は丁度よい距離だろうしの」

こくり、と雪花はうなずいた。

おやつを済ませ、吉次と有村が道場へと戻って一刻程が過ぎたころあいに聞き慣れた足をするような音が耳についた。

ミノだと気づくと、途端に雪花は気を滅入らせた。

今日のおやつも明日の約束も、とても雪花の心を晴らしてくれたというのに、ミノが来るというだけで気が滅入る。

雪花は立ち上がり、棚に置かれた懐剣を胸元にぐっと挟み込んだ。

「雪花さま、旦那様がおもどりです」

10

いつになく殺伐とした雰囲気を撒き散らし帰宅した主を迎え入れるのに、ミノはいつもの正面ではなくいつもは雪花がすわる上がりかまちの横に斜めに座る。

雪花が戸惑うと、

「雪花さまはそちらで」

と、普段彼女がいる正面を示され、その言葉に下男や下女も奇妙な顔をする。

雪花はこうしたミノの思想が時々判らないが、逆らうのも面倒で正面に座り、普段ミノがそうするように三つ指をついて頭を垂れ、主を迎え入れた。

嘉弘は無言で歩み、持っていた大小をそれでも雪花へと示す。雪花は慣れた様子で着物の袖口を伸ばすようにして――決して直手で刀に触れぬように相手の刀を押し頂いた。

前を歩む主の後を粛々とついて行くと、そっとミノが雪花に耳打ちした。

「雪花さま、御酒は私が用意いたしますから、旦那様のお着替えの手伝いを」

――雪花は戸惑いながらもその言葉にうなずいた。

屋敷、母屋の一番奥にある嘉弘の部屋へとたどり着き、いつもと同じ様に刀を納め、雪花はいつもと違い、嘉弘の羽織を預かり、袴を脱ぐ為に紐を解く。

着替えはいつも用意されている漆塗りの盆にある着流しで、雪花は頭の中で嘉弘の着物を脱がすのが先なのか、それとも脱ぐのは勝手にしてくれるのか、自分は着流しを手渡せばいいのだろうか？

となれぬ手順を考えていると、膝をついて袴の紐を解いている最中

の雪花の頤(おとがい)を、嘉弘(よしひろ)が持ち上げた。
「鳴け」
はき捨てるように言う言葉と共に嘉弘が上から押さえ込む。苛立ちをそのまま向けるように、嘉弘は雪花をその場に転がした。
あまりのことに慌てる。
片手を畳につけて、逃れるようにずるずるといざるが、嘉弘はその程度で辞める気はさらさらにない様子で雪花の足と足の間――着物の上から膝をおった。
それと共に体の後退が終わり、また背中が箪笥に当たる。
声をあげる間もなく唇を吸われ、雪花は相手の胸を必死に押した。
嘉弘の舌が歯列を割って浸入しようとするのを、雪花はぐっと口を閉ざして阻もうとするのだが嘉弘はそれを許そうとせずに頬を指で強く押して無理矢理に口を割らせようとする。と、小さな音と共にミノが障子を開き「失礼します」と顔をあげて唖然とする様を、雪花はどこかかすれる視界にいれた。
「旦那様……あまり無体な真似は」
「ミノ、酒をもて」
離れた口が静かに命じる。ミノは嘆息し、膳を主の傍近くに置いた。
「下がれ――誰もよこすな」
「ご命令とあらば従いますが」
「下がれと言っている」
言いながら、嘉弘は雪花を押さえ込む手とは反対の手でもって酒が冷酒と確かめると、それを徳利のまま自ら口にし、その口でもって雪花の唇をふさいだ。
半ば強制的に開かれた口の中に、酒の味が流れ込む。
それを横目に、ミノは礼儀正しく頭をさげて部屋を退出した。
雪花は酒を飲むのは二度目。
とろりと口腔をとおるそれに反発するようにむせたが、嘉弘はそれ

でも雪花を離そうとしない。
幾度もそれを繰り返され、やがてぼんやりと力を抜けた雪花に、嘉弘はやっと顎を掴む手を緩めた。
目じりに涙を浮かべ、みあげてくる雪花に嘉弘が唇をゆがめる。雪花の胸にある懐剣を引き抜くと、そのまま遠い場所へと投げ捨て、雪花の襟元を開いて顔をうずめた。
「……イヤ」
ゆるりと首を振るが、一息に流された酒に奇妙に体がほてり頭がぼうっとかすむ。
「おまえが――悪い」
悪い？
雪花は射るように自分を見る瞳を見やり、眉をひそませたが、相手は雪花の現状など欠片ほども感知しない。床も無いそこで無理矢理に雪花を転がし、苛(さいな)む。
声をあげるつもりもないのに、雪花の唇は小さな悲鳴を幾つも刻んだ。

気づけば――開かれた障子の向こうに銀の月がのぞき、それを背に嘉弘は酒を飲んでいた。
ぼんやりと転がり見つめながら、雪花は目じりから涙がこぼれるのを感じる。
「……」
――月光の下、長い黒髪の男が静かに酒を飲んでいる。
それを見ると、何故か雪花はとても悲しい気持ちがした。
体をそっと持ち上げる。
全ての衣類を剥ぎ取られ、今は脱ぎ散らされた着物がぞんざいに掛けられていた。
「来い」

雪花が動くのにあわせ、視線が向けられる。
雪花は唇を引き結び、睨んだ。
「……何故、こんなことをなさいます」
「貴様が選んだのだろうに、今更泣き言か」
「――」
「おまえには他に幾つも道があったろうに、自らその身を差し出し俺の女になったのだろう？」
そういわれると確かにそうなので、雪花は唇を噛んだ。

雪花は自分の愚かさを呪った。
この男へと今向ける殺意は、そうであった時とは違うものにしか思えない。
父を手に掛けたという男へと向ける感情ではなく、自らを苛む男へと向ける暗い感情だ。

だがそれは、自らが招いたものではないか。
――自分は本当に、この男を真実殺したいと願ったのか？

……ふっと、泡のように浮かんだのは、父へと向ける恨みになった。
雪花は自分の愚かしさに、月を背に座る男を見て儚く笑んだ。

11

剣術を学ぼうという決意は、雪花の中に澱(おり)のように沈んでいたものをかき混ぜた。
それは一匙の細き棒。
たった一度の変化は――雪花の生活に違う風を起こす。

雪花の世界は屋敷の一角のみで、道場も倉も彼女の世界ではない。
離れと屋敷の主のいる一角、浴室と厠(かわや)、厨(くりや)のみ。それしかもたぬ雪花の前に、有村藤吉は柔らかな笑みを浮かべて手を差し伸べた。
「手、つないでいきましょうか」
久方ぶりの外に足がすくむ雪花に、有村はそう言った。

正直外は怖かった。
外の空気が、人が、視線が、喧騒が――その全てが雪花を拒むように見える。ざわざわと揺れる喧騒が、まるで全て雪花を示すよう。
――あれが罪人の娘。
――あれが、物言わぬ妾。
――恥知らずの……

ぐらりとかしぐ体を、有村が支える。
そうして困ったように淡い笑みを浮かべた。
「籠を呼びましょうか」
その言葉にふるりと首を振る。
怖くて怖くて、今にも屋敷にたちもどりたい。けれど歩くことに意味があるのだと感じる。
細かく震える指先に、やがて有村は諦めた。
屋敷の門を出て未だ四半刻、それすらたっていないかもしれないのに、雪花は自分の胸元を汗が伝うのを感じた。

「ゆっくり、慣らしていきましょう」
その言葉に雪花は自分の不甲斐なさと同時に、見捨てられた気持ちで泣きたくなった。
有村は雪花の肩を軽く押すようにその向きを変えさせると、支えるように歩き出す。屋敷に立ち戻るのだという思いに切なさを感じれば、有村は優しく口を開く。
「雪花さんはご存知ないと思いますけれど――」
まっすぐ来た道を、それる。
四辻を折れてほどなくすれば、そこに茶屋。
「ここの団子もなかなかいけます」
幾つか道端に出された長椅子を示し、雪花を座るようにと促せば、
「いらっしゃいまし。ああ、有村の旦那じゃありませんか」と、茶屋の暖簾から快活な娘の声。
雪花がその声に視線を上げれば、娘はほんの少し声の調子を変えて、
「いつもの団子で？」と有村の前で座っている雪花をちらちらと盗み見た。

「だんごを二つ。ああ、やっぱり三つかな――食べれるでしょう？」
楽しそうに顔を覗き込まれ、雪花は周りの視線を気にしながら縋るように有村を見た。
――帰りたい。
こんな場所で茶など、恐ろしい。
その感情を抑え込むことがこんなに困難だとは思わなかった。

外が――こんなにも怖い。
そんな雪花の心を知ってか知らずか、有村は茶屋の娘が運んだ湯のみを一つ手に小首をかしげた。
「雪花さん」
労わるようにそっと指先が雪花の手に触れた。
「武道は心です。大事なのはまず平常心――責めている訳ではあり

ませんよ？　私も早計だったと思います。あなたは随分と屋敷の奥にいらしたのに、突然外に出されればやっぱり怖いですよね？」
　きゅっと胸が痛んだ。

有村は雪花に茶を飲むように促し、それから何が楽しいのか声をたてて笑った。
茶を胃に流し込むと、それでも幾分か落ち着く。隣に微笑む有村がいてくれることも雪花に平常心をゆっくりと与えた。
「いや、これはすいません」
笑ったことを謝罪し、それでもなお面白いのか有村はくつくつと肩を揺らす。
「いえ、あなたは不思議だなと思って」
　雪花はそっと首をかしげた。
「あなたは外が怖いのですね？
でもご存知ですか？　一般の人々は、あなたの暮らすあの家が――怖いのですよ？」
　その言葉は、何故かすとんと雪花の胸に落ちた。

「一般の方々に対して我々は決して刃を向けることは無いというのに、人々はまるで私達が日々楽しく人を殺しているとでも思っているのでしょうかね？
子供達の間で何と言われているか、あなたは知らないと思いますが……」
　さもおかしそうに有村は悪戯でもするように瞳を揺らめかせた。
「あの屋敷に迷い込んだものは切り刻まれる。
もしくは、悪戯ばかりの悪童には、あの屋敷に放り込むぞ、というのが脅し文句になるようです」
　庭も池もたいへん綺麗で素晴らしい場所なんですけどね、と有村は言う。
その言葉を聞きながら、雪花は幾度も瞳を瞬いた。

莫迦みたい。
――――そう、莫迦みたい。
雪花は知っていたはずだ。
あの家は、鬼の棲む家だと。だというのに、何故こんなにも外のほうが怖いのだろう。

少しだけ心が落ち着いた。
今も人の気配、視線、話し声が怖い。
けれど震える手はゆるりと止まり、雪花はこくりと茶を飲み下した。
心の中で、ひーふーみーと数字を数え、有村を安心させる為に精一杯笑顔を向けた。
「落ち着きましたか？
良かった。でも、今日はこのまま戻りましょうね？　ゆっくりと色々なものに慣れていけばいい」
有村はにこにこと雪花を見つめていたが、ふと何かを思い出すように視線をそらし、喉の奥がからむのか「んっ」と小さく幾度か喉の奥を鳴らした。
「？――――」
「いえ、あの……あ、だんご、美味しいですよ？」
慌てた様子で団子をすすめられ、雪花は多少まわりの様子を意識しないように　努めながらっくりと三つついた串団子を咀嚼した。

有村が何に気をとられたのだろうかと雪花は首をかしげたが、茶屋の奥、暖簾の向こうにここの看板娘の姿がちらつくのを見て、微笑んだ。
――――御二人は好きあっているのかしら？
そう思うとなんだか微笑ましく、ちらりと娘と視線があえば雪花はふわりと微笑んだ。

いいな、と思う。
誰かが誰かを好きという感情は、いいな、と思う。
———自分には到底ないものだ。
胸の奥に浮かんだのは、昔許婚として幾度か顔を合わせた千葉の家の次男。　雪花は長女で他に子もないものだから、千葉の家の次男が婿に入ることは決まっていた。
思えば千葉の家が冷たくなるのは道理だ。
欲しかったのは婿入り先で、嫁が欲しかった訳ではないのだから。
いつか自分も誰か好いた人ができるのか、そう思った途端、その思いは自らの手で握りつぶした。
もうこの身は嫁げるようなものではない。

しばらく茶屋でゆったりと過ごし、やがて有村は雪花を促した。
「帰りましょう」
こくりとうなずき、有村の少しあとをつくように屋敷の正門へと向かいかけたのだが、有村の手が雪花をとどめるように前に出た。
「裏門から入りましょう」
その言葉にうかがうように雪花が有村の向こう、屋敷の正門の方へと視線を向ければ、数名の男が声を張り上げていた。

———ヒトゴロシ、と。

12

雪花が寝込んだのは、外出がたたったのだろうと――
ミノが有村に小言を言っている。
離れで一人床につきながら、それでもその喧騒は聞き取れた。

雪花は熱でぼんやりとする視界で雪見窓から外を眺めながら、有村への申し訳ないという思いと同時、ミノへの不満をくすぶらせた。
幼い頃――小娘であった頃にこの屋敷に引き取られ、その後は誰よりミノと顔をつき合わせてきた。娘らしい着物の着方も、浴衣の縫い方も、花の作法ももの言わぬ雪花に教えてくれたのはミノだ。
――だが、その全てが雪花を嘉弘（よしひろ）の妾とする為の布石であるのは明らかだった。
時折、ミノが憎らしく感じる。
けれどそれは本当にミノが悪いのであろうか？
自らの非を、他人へと移し変えているのではないだろうか？

雪花は熱に体を支配されながら、せんないことばかりを考える。
「失礼しますよ」
熱も二日目。床についたままの雪花の耳に柔らかな声が入り込み、すすっと縁側に続く障子が開く。
笑みをたたえて現れたのは有村藤吉で、雪花は咄嗟に身を起こそうとした。
「いえ、そのままで――すみません、私のせいで」
苦笑をこぼす相手に、雪花はそれでも上半身を起こして首を振った。
――あなたのせいではない。
それだけは伝えたい。伝えねばならなかった。
障子から五歩の距離を、有村は音をさせずに近づく。

その手にあるのは、見慣れた桃源堂の菓子折り。雪花の布団の脇に置かれる茶器の盆にそれを載せ、ついで有村は自らの袂を探った。

「浅草様でこれをいただいて参りました。
お守り代わりに」

そうして差し出されたのは、ころりとまろやかな鈴。

組み紐に下げられた鈴は、手毬を小さくしたような様相で実に愛らしく、雪花はふわりと笑んだ。
ちりんっと鳴る音も愛らしい。
熱もだいぶ引いた雪花は、有村の手をとり、ゆっくりとその手の平に指先を走らせた。

――――うれしいです。
「喜んでいただけてよかった。
それでは、病床に長居をしてはあなたの体に障る。私はこれで失礼しますね」

こくりとうなずく雪花に、有村は一旦背を向けて縁側へと向かい、けれど途中で振り返った。
「体が本調子になりましたら、稽古をしましょう。
今度は無理をせずに中庭で」
では、と有村が頭をさげて下がるのを見送り、雪花は手の中に残された鈴をきゅっと一旦握りこみ、ついで耳元でゆっくりと振った。

有村の優しさが雪花の淀んだ気持ちをさらさらと流す。
鈴の音が闇を払うかのようにも聞こえる。
その一方で、雪花は瞳を震わせた。
――稽古を願い出たのは、嘉弘との絶対的な力の差を思い知ったか

らだ。
このままで嘉弘と向かい合うことなどできはしない。せめてもう少し太刀打ちできる何かが欲しい。
雪花の頬を涙が一筋落ちた。
なんて浅ましい――なんて愚かしい。
そして、優しいあの人を利用する自分はなんて恐ろしい鬼であろう。

12（後書き）

江戸古地図を見ると、浅間さまは「浅草寺」と書かれていますので、「浅間様」ではなく「浅草様」と明記しました。

13

雪花の熱がすっかりとさめたのは翌日の朝。
それでも大事をとってと床はそのままに、その間雪花はぼんやりと離れで過ごすようにといわれていた。
「旦那様がお戻りになられましたらおいで下さい」
ミノはすっかり雪花を女主人扱いし、それまでの時々見せた傲慢な態度もなりを潜めた。
　することもなく、雪花は仕方なく嘉弘の浴衣を縫い上げる。
昼餉がすめば軽く休み、それすらすんでしまうと――ひょこりと吉次が有村を伴って顔を出した。
「どうだね、雪花や」
その顔は心配気だ。
雪花は続けようと思っていた浴衣から針を抜き、裁縫道具を手早く片付けると微笑んだ。

「顔色もようなったな、うんうん、まったくわしは心配したぞ？よもやこの有村に茶屋にでも連れ込まれでもしたのかと」
「御前っ」
有村が声をあげるのは珍しく、雪花は吃驚して有村を見上げた。
それから気まずそうに苦笑を零す有村の様子に、雪花は小首をかしげて吉次の手に指を走らせた。

――茶屋が問題ですか？
「ん？」
――連れて行って頂きましたが。

「ほっ、そうなのか？」
嬉しそうに言う吉次に、被せるように有村が言う。

「御前！　戯言もそれまでになさって下さい。
私が雪花さんをお連れしたのは普通の茶屋ですからね。串団子を食べただけですから」
――生憎と、この屋敷から外を知らぬ雪花は妾という言葉は知っていても、出会い茶屋なるものがあるとは知らぬ。
好き合う同士、人目を偲んで触れ合う茶屋があるなどとは露とも思わない。
二人の様相に益々不思議そうに見るしかできず、またそれが吉次の笑いを誘う。
「よいよい、冗談じゃ雪花や。
まぁ、そのうちにな。有村にせがめば連れていってくれよう。うん」
「冗談になってないじゃないですか！」
まったく意味が判らず、雪花はこっそりと顔をしかめ――きかいがあれば嘉弘に尋ねてみようと心に留めた。
「そうかぁ、冗談になっとらんかぁ、すまなんだなぁ有村」

にたりと笑いながら横目で有村を見る吉次。
何故そんなに二人が楽しそうなのか雪花にはわからない。

それでも、口を利く気には到底なれない。
それは本当に何なのだろう。嘉弘にはもうすでにこの口を利いてしまっていて、意地で喋らずにいたことすらばれている。ならば今更だろう――
ふと、雪花はなんとなしに自分の胸元に触れた。
今はそこに懐剣は納められておず、帯紐にりんっと小さな鈴が鳴った。

誰も雪花に喋れとは強要しない。
それはつまり、屋敷の主は雪花が実は口を利くことができるのだということを語っていないのだ。

「雪花や？」
呼びかけに慌てて顔をあげる。
「疲れておるのか？　すまなんだな、おまえはまだ病み上がりだというのに」
雪花は慌てて首を振り、微笑んで吉次の手に触れた。
――退屈しておりましたから、嬉しいです。
「そうかそうか、雪花はかわええのぉ。わしがもうちっと若ければのぅ」
吉次の軽口や柔らかな眼差しが、どれだけ雪花にとって救いであるか知れない。頭では理解しているのだ。彼もまた、山田浅右衛門であったのだと。
けれど今の彼にはそういったものがない。
嘉弘が持つ、禍々しい闇が。

雪花が茶をいれ、吉次が持ち込んだ菓子と共になごやかな時間を楽しんでいると、やがて母屋の渡りをミノが現れた。
三人の様子にくっきりと眉間に皺を刻み込み、ちらりと有村を見て、そうして吉次を見る。
最後に雪花を確認すると、ミノはきちんと膝をついて頭を下げた。
「雪花さま、旦那様がご帰宅になられます。お支度を」
「なんだ、ほうっておけばよいのに」
吉次が顔をしかめた。
「雪花は病み上がりじゃ。いますこし休ませてやらんと」
「雪花さまの熱は昨夜のうちに落ち着いておりますよ。旦那様とてご心配であられるはず。元気な姿を見せていただかねば困ります」
――さも当然という口調できっぱりと言い、ミノは男二人を追い出しにかかった。
「まったく、ご隠居さまときたら好き勝手ばかりなさって。

道場を見てやるなんておっしゃるくせに、気の向いた時しか見ていらっしゃらないし」
ぶつぶつと悪態をつきながら、雪花の床が並べられている隣の部屋から着替えの着物を一揃え引き出す。
　着替えを手伝いながらも、ふとミノの手が雪花の額に触れた。
「熱はもう大丈夫ですね。まぁ、さすがに今宵ばかりはお勤めも止めていただきますが、旦那様の為にも笑顔を見せてさしあげて下さいましね」
　子を心配するような顔をするくせに、ミノの言葉は追い立てるもののようだ。
雪花は彼女の言葉の中にある、お勤めという言葉に首をかしげそうになったが、その意味を悟れば顔がこわばった。

――――あれが、私の、勤めだと。
それに体温があがるが、すぐに自らの思考が冷水を掛けた。
雪花はまごうことなく、嘉弘の妾である。
奥に囲われ、体を苛まれ、ならばそれは確かに勤め。
　苦界行きを救った男。
けれど、することは変わりない。
多人数に抱かれるか、一人の男に抱かれるかの違いではないか。

リン、と鈴音が響く。
「おや、なんです？」
けげんそうにミノが首をかしげる。
着替えのおり、鈴は懐剣の組み紐に結ばれ今は雪花の帯に刺さる。
雪花は淀むような思考から浮き上がり、清涼剤のように自らを救い出した鈴に触れた。
「可愛らしいことですね」
ミノもその音に笑みを零し、「さぁ、参りましょう」と雪花をうながした。

14

正面玄関で家人共々主をまっていた雪花だが、籠ではなく珍しく徒歩で帰宅した主を前に、驚愕の瞳を見開いた。
　それはなにも雪花だけで無く、家人も一緒。
「旦那さまっ」
「騒ぐな――――返り血だ」
忌々しいというようにいいながら、道場の門下生らに外の始末を命じる。
「医者は来ているのか？　殺してはいない。さっさと役人と医者を手配してやれ」
屋敷の外、帰宅するすんでで賊により襲われたその様子に、屋敷内が蜂の巣をつついたような騒ぎになりかけたが、嘉弘は大小を雪花に渡すわけでもなく、ずかずかと歩む。
「風呂は？」
「あ、用意できております」
ミノが応える。
雪花は刀も渡されず、どうして良いのか判らずに中腰で主を見送ってしまったものだが、すぐにミノによって「雪花さまっ」と呼ばれ、慌ててそのあとについた。
「旦那様の御着替えをお持ちしますから、雪花さまは風呂までご同行して下さいな。着替えのお手伝いと、お刀を」
　こくりとうなずく。
数歩先を行く嘉弘と言えば、その口元がゆがみ瞳が爛々と輝いている。その体全体から立ち上る殺気に雪花は身震いした。
――怖い。
　自然、胸元の懐剣を握った。
りん、鈴が鳴る。

母屋の外れに作られた主筋用の風呂。
突然やってきた主の姿に、風呂番の男が慌てて頭を下げる。
「湯はまだぬるいように感じます、ただいますぐに湯の温度をあげますので」
慌てて外に行く男の声など、おそらく嘉弘は聞いてなどいまい。
苛立ちを撒き散らしながら脱衣所までくれば、手にしていた刀を乱雑にあいた籠の中に放り込む。
慌てて雪花がそれへと手を伸ばせば、
「触れるな」
と叱責のような声が飛んだ。
それならばと、おずおずと嘉弘の着物へと手を伸ばす。
帯を解こうとすれば、苛立ちのままに睨まれた。
「良い――おまえは部屋にいろ」
触れるなという憤りに、雪花は途方にくれはしたものの、主が何もするなというのであればそれに否やなどあるはずもない。
雪花はきゅっと手を握り、一度頭をさげた。

りんっ、と鈴が鳴る。

「――」
会話もなく雪花は浴室を出て、静かに離れへと戻ろうと歩む。
途中で着替えを盆に載せたミノにいきあえば、彼女は「どうなさいました」と声をかけてくるが、雪花は曖昧な笑みで首をふり、自らの離れを示した。
「機嫌が悪いのですね。
判りました――ではもう離れでお休み下さいな。のちほど夕餉をお持ちしますから」
こくりとうなずいて雪花は離れに下がる。
未だ頃合は夕闇。

闇に染まりきらぬぼんやりと明るい空。
一人きりになりぼんやりと庭を眺め、雪花は顔をしかめた。
恐ろしい――
むせぶような血の香り。いつもは香の香りをまとい帰る嘉弘の身を、あれは確かに血と臓腑のような香り。本能が目をそらすような匂い。喉の奥をせりあげる異臭。
　苛立ちばかりを含んだ眼差しは、たとえ家人であろうと切り捨てることのできる冷たい熱を孕んでいるようにも見えた。
もし、今のあの男に逆らえば誰であろうと切り殺される。
かたかたと身が震え、すがるようにぎゅっと懐剣を握った。
　へたりとその場に座り込む。

あの男を知っていると思っていた。
だが、雪花はそんな自分を叱責する。
――あんな恐ろしい生き物など知らぬ。
あんな恐ろしい相手を、自分は、殺そうとしたのか？

あの男は……――
思考の海をただよう雪花を正気づかせたのは、たんっと乱暴に勢いのみで開かれた障子。
母屋へと続く廊下から現れた嘉弘は、づかづかと室内に入り込み、射殺す視線で雪花を見下ろした。
「部屋にいろと申したろう」
「……」
　ここが部屋だ。
そう反論しようにも、舌が動かぬ。
怯えを隠さぬ雪花に、嘉弘は舌打ちを一つ。
「血が沈まぬ、おまえが沈めろ」
その頃には追いついたミノが、さすがに主の無体を諌めるように雪

花を庇う。
「旦那様っ、雪花さまは病み上がりでございます。今宵は――」
「どけ、ミノ」
静かに、冷ややかに嘉弘がミノを睨む。
さすがのミノもこのような嘉弘を前にするのははじめてなのか、言葉を凍らせた。
「他人の色事を見るのが趣味ならとめぬがな」
たやすくミノをどかし、さっさと雪花に手をかける。
雪花は恐怖に逃れようとするが、容易く抑えられ――救いを求めてミノを見ても、ミノは蒼白になり、静かに頭をさげて下がってしまう。

誰も、助けてはくれない。

「っっ」
先ほど覚えた血の香りを思い恐怖がたちのぼる。
だが、今の嘉弘から立ち上るのは、石鹸の香り。
――ぬかなどではなく、高級なるそれを遣う男に、何故かふと力が抜けた。
抜ければそこにいるのが先ほどまでの死臭と殺意を垂れ流すバケモノではなく、もう少し判りやすい鬼である。
「鳴け、雪花」
「ッ――」
乱暴に雪花を抱く男の下で、雪花は先ほどまで弱くなっていた自分の気持ちを叱咤した。

――負けなどしない。
まけなど、しない。
強く、強く。
「くっ、くくく」
耳元で楽しげに笑う。
それは笑う、というよりも哂う――嘲笑。
「有村に稽古をつけてもらうそうだな」
体を繋ぎ合わせた途端、雪花の耳朶を噛んで嘉弘が囁く。
その言葉に、雪花がわかりやすいほどに反応し、それを嘉弘は楽しんだ。
「ぁっ――」
「そうだ、鳴け、雪花」
声は出すまいと堪えるのを、あざ笑うかのように嘉弘が笑う。

「オレのもとまで、這いずりおちて来い」
――雪花は全身の力を抜いた。

鬼が、歪んだ笑みで哂う。

15

――先日嘉弘を襲ったのは、処断された罪人の友人だとか。
「まったく阿呆らしいこと。
旦那様はただそれをお勤めとなさっているだけだというのに。頭の悪い」

ミノの言葉に悪意は無い。
ただ当然のこととして不用意に雪花の前でもらしたのだろう。
雪花にも判る。
――嘉弘が討つのは罪人で、彼がしている仕事というのは将軍家へと献上される刀の試し斬りが名目。
彼はあくまで「お試し切り役」であり「首切り役」というものではない。

ならば雪花の抱いた殺意は阿呆らしいの一言で終わるのだ。
父を殺したと言う嘉弘。
――だが父は罪人であったのだから、やはりそれは仕方の無いこと。せんないこと。
そうして嘉弘は武家でなく、浪人。
あくまでも彼一個人。
つまり、汚れ役をやる彼は幕府と無縁。
ただ彼は一人で汚れ役をこなし、そして悪感情を受ける。それはおそらく、幕府の目論見。
悪いのは山田浅右衛門という、人の死を生業としている悪鬼のみ。
多大な報奨を受け取り、人を殺し、その臓腑をえぐる悪鬼。
それはまったく幕府の感知するものでない。
頭では理解しているのだ。

だが感情は――正直、宙に浮く。
父が悪いと気持ちがゆれ、そしてまた、嘉弘が手を掛けたのだと揺れる。
雪花の胸でくすぶるものは、今となっては父への恨みか、それともあの自らを食む男へのものなのか。

「では少し、基礎体力を作りましょう」

体が全快すれば、有村が雪花に微笑んだ。
だがその手には竹刀もない。腰には大小がさしてはあるが、それを使うとも思われぬ。
雪花が瞳を瞬くと、有村は足元にある石でもって地面に丸く円を引く。
「いらっしゃい」
ひらひらと手で招かれた。

描かれた円は大人が三人程は入れるほどの大きさ。
その中に入るようにと促され、雪花は首をかしげつつも言われたとおりに入る。
と、有村もその円に入り、ぱんぱんっと手を叩いて指先についた土を落とした。
「では、私を捕まえて下さい」
――雪花は眉を潜めた。

こんな狭い場で何を言っているのか？
手を伸ばせばすぐに有村に触れられる距離だ。
「掴むのは私の右手ですよ。ではどうぞ」
ひらひらと右手を示され、怪訝に思いつつも雪花は言われたように相手の手を掴もうとした。

ひょいと逃げる。
ひょい、ひょいひょい。ひらり。
「高い場所には逃げませんから、思う存分どうぞ」
にっこりと微笑む相手を、雪花は唖然と見つめた。
――こんなに狭い場所であるというのに、雪花の手が有村の手を捉えることができない。
夢中になって追い掛け回していると、やがて呆れたような吉次の声が聞こえた。
「まぁた楽しそうなことをしとるな、有村」
「おや、御前。お茶ですか？」
「そうじゃ。むさくるしい男共と渋茶をすすってもつまらぬからな」
手にはいつも通り、菓子屋の包み。
「おいで雪花や。わしに茶をいれておくれ」

「まだはじめたばかりなんですよ、御前」
「雪花は汗をかいておるようじゃが？」
――それは雪花の基礎体力が無いからだ。
「そうですね。では、お茶にしましょうか」
有村は雪花が肩で息をするのを笑い、捕まえろといった右手で雪花の手首を引いた。

――今のにどんな意味があるのです？
雪花は茶の用意をし、有村の手に指を走らせる。
ほんの少し、拗ねてもいた。
雪花が望んでいるのは、剣術だ。勿論、懐剣と長刀とはまったく使いも違うであろうことは理解している。だが、雪花の想像したのは

竹刀を振ったり、刀の持ち方を倣うことだ。
　こんな児戯に意味があるのか。
雪花が恨みがましい目で見るのに多少たじろぎながら、有村は苦笑した。
「雪花さんは体力がまずない。
あと手の力が――」
すっと、手のひらをつかまれた。
せんだって吉次がしたように、むにむにと指をもまれるとなんとも気恥ずかしい気持ちになる。
「雪花さんの手は柔らかで、すぐに竹刀を持つには弱々しい。
私の手を握ってごらんなさい。判りますか？　無骨でしょう？」
そういう手は大きく分厚い。
表面の皮が硬い。
「ゆっくりと体力を作りましょうね」
教師の顔で言われれば、雪花とてそれ以上の文句も言えぬ。
「手の力もつけなければ、すぐに破れて痛い思いをすることになる」
――雪花は苦笑した。
　どんな時間をかけたところで雪花の手が有村の手のようになることは無いように思う。それが悔しくてぐいぐい手のひらを押していると、吉次が「ごほん」とずいぶんとわざとらしく咳をした。
「年寄りは邪魔かのぉ」
「……」
ぱっと、有村の手が雪花の手から逃れた。
「まぁいいわい。
雪花や、今度花見にいかんか？　もう少しで桜も三分咲きになろう。
そのあとは驚くほど早く満開になろう」

どうだ？
といわれ、雪花はきゅっと眉根を潜めた。
先日も到底外出などできなかった。
外は怖い――コワイのだ。

「籠をしたててな。墨田の川で船に乗るんじゃよ。
なぁに安心おし。舟遊びじゃからな。他の誰がいるわけでなし――
月夜に美味い料理をつまみ、水面もにうつる桜と月を楽しむのじゃよ」
それは随分と贅沢な遊びだ。
一般の庶民はただ一度もそんなことをすることは無い。
雪花は戸惑いに瞳を揺らした。
「承知しておきなさい、雪花さん。
この御前はここで貴女に袖にされれば、それこそ中のように桜木をこの庭に運びかねないのだから」
さらりと有村が言った言葉だか、言った途端有村は失言に口元に手を当てそうになる。

「ほっ、中ときたか」
「――ただの知識ですよ」
「ほぉ。おまえもなかなか隅に置けんなぁ」

また判らぬ会話だ。
――吉原を示すその言葉を、知らぬはまた道理。
「そんなことは当代のほうがよくご存知でしょうよ」
いやそうに言う有村に、どうやらこれも聞いてはいけないのだろうと雪花は理解する。茶屋のことと同じく、そのうち嘉弘に尋ねるきかいもあるかもしれない。
「とにかく、行きましょう。雪花さん？」

「わしは別におまえは誘ってないぞ、有村」
「また冷たいことを」
「雪花が行くと言うてくれるんであれば、まぁ、おまえも末席にくわえてやっても良いがな」
そんなふうに言われては、雪花とて断りづらい。
雪花は戸惑いを隠さぬまま、
――夜でございますか？
と尋ねてみる。
「夜じゃよ。月の綺麗な晩にな」
――旦那様にお尋ねしてみます。
さすがに昼間でないのであれば、主の許しが必要だろう。
雪花はあくまでもこの屋敷の家人なのだ。
吉次は苦いものでも噛むように顔をしかめたが、やがて息をついて笑った。
「あれも孫じゃが、のぅ、雪花。
わしにしてみればおまえもわしにとって孫や娘じゃ。それだけは忘れてくれるな？」
優しく語るその意味が判らず、雪花は不思議そうに首をかしいだ。

16

花見に行きたいのだと――
口にだす前に、それは突然言われた。
「――来い」

嘉弘が休みというのも珍しいが、その休みに離れを訪れるのはもっと珍しいことであった。
珍しい、否――そもそも嘉弘がこの離れを訪れたのが二度目のことだ。
雪花がいつものように針仕事をしていると、何の言葉もなくタンっと襖が開かれた。
ミノのようにすり足の足音もさせずに現れる嘉弘に、雪花は心の蔵が止まるかとびくりと身をすくめ、ついで針で指をついた。
「っ――」
「出かける、ともに来い」
傲慢な言葉。
雪花は慌てた。ふるふると首を振るが、相手はその思いを汲もうとしない。
苛立つように見下ろされ、仕方なく口を開いた。
「――無理です」
「何がだ」
「……私は、外が……」
ぐっと喉の奥が詰まった。
身が小さく震える。
「外が――怖いのです」
声が震え、身が縮こまる。しかし嘉弘はそんな雪花をしばらくながめ、やがて鼻で笑った。
「おまえにオレよりもこわいものがあるのか？」

「――っ」
　じっと冷たい眼差しが雪花を見下ろす。
手と腹に力が入り、雪花は一旦瞳を伏せた。
負けない。
「行きます」
ふっと嘉弘が口元に笑みを浮かべる。それを睨み返し、雪花は棚に置いた懐剣を胸元に納めた。
　正面から屋敷を出る時、ぐっと喉の奥がなり小刻みに身が震える。奇妙な汗まで流れ出すしまつ。
ミノが困惑した様子で送り出し、嘉弘が何が楽しいのか口の端を歪めて続く雪花を一旦促すように顎で外を示す。
――奥歯を噛んで、雪花は覚悟を決めた。

ただ嘉弘の背を見て歩く。
他は一切気に掛けない。
雪花が気を張って歩むのと違い、嘉弘は何の気負いもなく静かに歩む。その背の気楽さに雪花は憤慨していた。
息が切れる。
ゆっくりと開く二人の間に焦りを覚え、雪花はぎゅっと手を握り締め、声をあげようと口を開いた。
　まるでそれを知るように、ぴたりと嘉弘が足を止めて振り返る。

何を言うでなく、すっと手が差し出されて驚く。
差し出された左手の意味が判らずに、雪花は驚愕した程だ。
「どうした。来い」
「……どちらに、行かれるのです」
そう、その行く先すら雪花は知らぬ。
恨めしげに相手を見上げれば、嘉弘は普段通りの様子で「散歩だ」

と信じられないことを言う。

――まったく意味が判らない。

本当にこれはあの嘉弘なのかと、もしや自分は狐につままれているのではなかろうかと雪花の顔色が変わるが、嘉弘はそんな雪花を頓着しない。

戸惑う雪花の手を無遠慮に引き、歩く。

それは確かに散歩であった。

散歩としかいいようのない、行動。

どこというあてはなく、ただ歩む。疲れれば茶屋で茶を飲み、川辺を歩き、竹林を歩む。

楽しく会話するでなく、ただ歩む。

時には芝居小屋をのぞき、道端の大道芸に足を止める。

人の視線に怯えながら、雪花はただ嘉弘だけを見ていた。

――この男より怖いものなど、ないのだから。

意味も判らず振り回されるのが――それから三日の間、続いた。

そもそも、何故嘉弘は仕事ではなくこんなことをと、とうとう雪花が痺れを切らしたころあいに、ふいに嘉弘が呟いた。

「きたか」

呟いた言葉と共に、嘉弘の口元が緩んだ。

17

――きたか。

その言葉と同時にぐっと雪花の手を掴み、ほうるように自分の後ろに雪花を移動させる。

その時になってやっと、雪花は自分が先ほどいた方向――三人の男がいることに気づいた。

男達の手にはすらりと白刃がすでに抜かれ、その瞳はぎらぎらと強い意志を宿していた。

「三人か」

チッと嘉弘が小さく舌打ちしたが、そのあとには「まぁいい」という言葉が続く。

「まさかただの物盗りという訳ではあるまい？」

「黙れ！　貴様が討った兄の恨みっ、ここで晴らそうぞっ」

「どれだか知らぬがな？」

つまらなそうに言い、嘉弘はすらりと腰の刀を抜き放つ。

雪花は自らの胸元、懐剣を握り締めて瞳を大きく見開いた。

一人の男が身を低くして突っ込んでくるのを軽く避けて振り向きざまに嘉弘の刀が一閃する。その白刃の閃きで男がくぐもった声をあげる。

その血を見た途端、嘉弘の瞳がぎらぎらと輝いた。

ぺろりとその舌先で唇を舐めて微笑む。

「喜べ、殺しはしない」

クっと喉の奥を鳴らせば、もう一人の男が嘉弘に突っ込んでいく。

何事か判らぬ声を張り上げて来るその男は、刀先をぶるぶると震わせ、切るというよりも突く仕草だ。

――これは駄目だ。

瞳を大きく見開きソレを見ながら、雪花は懐剣を握り締めて身を硬くした。

なんということだろう。

嘉弘が楽しんでいるのに対し、男達は必死だ。

その顔にも動きにも余裕というものがなく、ただがむしゃらに嘉弘につきかかる。

これでは、駄目だ。

こんなでは嘉弘を殺すことなどできない。

とうの嘉弘はチッと舌打ちする。

当初の嬉しそうな様子がすっかりと不満に溢れている。

悲鳴とも怒号とも聞こえる中、ふと雪花はもう一人の男と目が合った。

途端、ぎらりとその瞳に意思が見える。

慌てて逃れようと身を翻したが、相手のほうが早い。

なりふりかまわぬ動きで男が声をあげて迫る。

雪花は咄嗟に自らの懐剣の紐を解こうとしたが、それはもつれて容易くとかれぬ。焦りと恐怖で身がこわばり、

男が刀を振り上げた時――すっと間に身を沈めるようにして入る嘉弘が見えた。

左足を低く大きく踏み出し、左手、ひくい位置から白刃を上へと跳ね上げる。

それと同時、右足を軸にして身を捻り上げたかと思えばもう片方の

足が男の腹を蹴り倒した。

ザっと砂を跳ね上げる音、男が倒れる音、そして、嘉弘は持っていた刀を軽く振るとそのまま刀を鞘へと戻した。

――それをどこか遠く。自分すら含めてその半歩後ろで見るような奇妙な心持で見つめた雪花は、腰を地面に落としていた。

「行くぞ」

「……」

立ったままの嘉弘が見下ろしてくる。

雪花は自らの喉がやけに渇くのを感じ、ハッと辺りを見回した。

――男が三人、呻いている。

殺しはしない、その言葉の通りに嘉弘は彼等を殺してはいなかった。だがそのどれも足や腕に大きな傷があり、放っておけば使い物にならなくなるであろうと知れる。

あたりは血の匂いでむせかえり、雪花の臓腑までも揺れ動かす。ごくりと喉を動かし、そのなかでも一番傷が深そうな男の許に、雪花は自らを鼓舞してなんとか近づいた。

「くそっ、殺せっ」

忌々しそうに叫ぶ男は苦痛に歯を食いしばっている。

それは先ほど雪花へと向かってきた男で、背後に嘉弘に利き腕を切られた男だ。

雪花は自らの袂に手をいれ、手ぬぐいを取り出すとそれを引き裂き一方で血を拭い、一方でその傷をもつれるような手で必死に巻いた。

男の瞳が憎しみもあらわに見つめてくる。

よくみればその姿は素浪人よりも酷い。

擦り切れ、あせた着物も、髪の手入れもままならない。

雪花は自らの頭に手を回し、幾つか刺さっている簪から一番飾りが

細かく、美しいものを引き抜き、男の袂に入れた。

「医者に行って」

短く告げると、そのまま苛立ちを向けてくる嘉弘の許へと戻った。

――あれは、自分だ。

あれは……

「来い」

短く告げる男を前に、雪花はぐっと腹に力を込めた。

18

「雪花や」
夕刻であった。
屋敷に立ち戻り、雪花がぼんやりと庭を眺めていると、珍しく吉次が渡り廊下を渡って訪れた。
普段であれば庭を巡り縁側から来る人の意外な訪問に、雪花はそれまで放心するようにしていた自らの腹に力を込め、軽く頭を下げた。
「花見に行くぞ」
その言葉と同時にずかずかと雪花の前に立つ。
「籠を手配してある。行こう」
雪花は驚き、慌ててふるりと首を振って駄目だと示す。
今宵は嘉弘が居るのだ。断りもいれずに外出などできようはずもない。
――何より、今宵、あの男は雪花を抱く心積もりであろう。
昼間のうちに血を見たのだから。
ふと、雪花の内に陰りが生まれる。

絶望的な程の強さ。
己と、嘉弘との違いをまざまざと見せ付けられ、ただ自らは恐怖したのみだった現実。
嘉弘は、返り血すら浴びていなかった。
「嘉弘を気にしておるのか？
もうあれには話してある。だから気にせずにおいで」
くいっと手首をつかまれて立たされる。
吉次は瞳を細めて優しく、ただ優しく雪花を見つめた。
「たんと美味いものを食おうな」
その優しさに、雪花ははにかむような笑みをそっと見せ、うなず

いた。

　それは吉次の配慮であろう、人に会わずにすむようにと籠は船着場まで雪花を運んでくれたし、船の船頭すら姿を見せず、仕立てられた屋形船にはすでに料理が整っていた。

　片方の障子を開き、船はゆっくりと船着場を離れ隅田の川を流れる。

「花の良い頃合に船を止めてもらえる手はずだ」

と、吉次は機嫌が良い。

「御前、呑み過ぎないで下さいよ」

すでに船でまっていた有村は、酒の管理に急がしい。

――膳には刺身に焼き物、天ぷらや揚げだし、玉子と彩りよく並び、いくつもの酒の銚子と徳利。

　三人だけの宴は随分と豪華なものだ。

そして、花。

未だ散ることのない桜が川沿いに並び、それが月明かりに水面に反射して幻想的な雰囲気をかもした。

「呑みますか？」

　それまで水を飲んでいた雪花に、ふいに有村が銚子を示した。

酒にたいしてあまりいい印象が無い雪花は躊躇したが、にこやかな顔で有村に言われて無下に断れずにそれを受けた。

　とろりと白濁した液体が猪口を満たし、それをおそるおそる口へと運ぶ。

香りは、まるで果物のように甘く。

そしてそれは喉を柔らかくなで上げて嚥下された。

自然と笑みが浮かび、それを見て有村も笑う。

「雪花さんもこのくらいは平気ではないかと持ち込んだんです。口当たりがいいでしょう？　せっかくの酒の席です、たまにはいいで

しょう」
「だまされるでないぞぉ、雪花。
そやつは狼じゃあ」
「御前、もう酔った訳じゃありませんでしょうね」
嘆息交じりに有村が吉次の世話をやく。
その様子を微笑ましいと眺めながら、雪花はこくりこくりと酒を口にした。

腹の奥底でこわばっていた何かが解けるような気がする。
――愚かしい。
雪花は、昼間の男達を見てそう思ったのだ。
それはとても苦い。

嘉弘の罪とは何であろう。
嘉弘には罪があるのだろうか。
――無いのであろうか。

あの男達は兄の仇だと嘉弘を憎々しげに見ていた。
では、その兄に罪が無いとでも？　それを処断した幕府は？
なぜ嘉弘が憎まれるのか。

その考えは堂々を巡る。
最終的につくはずの答えを前に、雪花は絶望的な気持ちになった。
――嘉弘に罪がないと認めてしまうのは、全ての否定。
私は……いったい、なんであろうか。

「雪、花……さん？」
心配気に有村が雪花を覗き込めば、雪花はただはらはらと涙を零していた。

辛いのではない、ただ、ただ切ないのだ。
ただ愚かしい。
自らを哀れむ愚かな子供、それが自分。

――こてりと雪花が寝入れば、有村と吉次は顔を見合わせた。
「かわいそうに……」
「おまえ、持ち帰るか？」
「は？」
吉次は徳利に直に口をつけながら、その瞳はつまらなそうに眇めている。
「……やつは駄目じゃ。あれは……雪花を囮に使いおった」
忌々しいというように舌打ちがもれる。
最近嘉弘が雪花を連れ出しているのは、当然吉次も有村も知っていた。どんな酔狂だとは思っていたが、
「どういうつもりだと問うたらば、あやつ何と申したとおもう？」
「――」
「一人で歩いたところで警戒をといてのこのこ出て来るものなどいないだろうと抜かしおった！　まったくその通りで反吐がでる」

「わしも悪いんじゃ、判っとる。
あやつが幼子を連れ戻った時には、あれにも情があるのだと喜んだものじゃ。したが長いこと放り出し、最近やっと省みるようになったかと思えばこれだ」
「御前、呑みすぎですよ」
「……のう有村。
わしは雪花が可愛い。可愛いんじゃよ。ただ幸せになって欲しいだけなんじゃ」
「だから、呑みすぎですよ」
有村は嘆息し、自分の膝を枕に眠る雪花を慈愛のこもった眼差しで見つめた。

「私は所詮人切りです。
……この人には相応しくありませんよ」
自嘲気味の言葉を、吉次が鼻で笑う。
「愚かしいの」
「――そうやって生きていくものでしょう？
だから、御前、その手にもってる徳利をとりあえず置きましょうね
？」

19

雀の声が、耳に届いた。
――朝の気配に雪花の瞼が小さく震え、同時にずきりとした鈍い痛みに顔をしかめた。
それは覚えのある痛みで、二日酔いというものであることはすぐに承知した。

そうして驚く。
自分が寝ている場所に。
自分の隣で寝ている男に。
単のみで横になっていた自分に――

昨夜は吉次と有村と共に屋形船で夜桜を楽しんでいたはずで、その時からの記憶が無い。
軽く目を見開いて、だから雪花はじっと隣で眠る男を見つめてしまった。
――嘉弘(よしひろ)。
どう帰宅したのかも判らず、何故嘉弘と共に寝ているのかも判らない。
雪花は軽く動揺しながら、ふと布団の脇の朱塗りの盆に置かれている自らの着物に気づいた。きちんと揃えておかれている。
ならばそれをしたのはミノだろう。嘉弘が几帳面としてもそのようなことをする筈はない。
軽い混乱が収束すれば、ついで目に入るのは懐剣だった。
苦いものが口の中に広がる。
衝動でそれを手に、ゆっくりと白刃を引き出す。
こくりと喉が上下して、やがてそれを下に向けて両手でかかげ――
雪花は嘉弘の胸元へといざなった。

この刃を、下げれば、嘉弘が――死ぬ。
腕に力が入り、わずかに震える。
口の壁がからからに乾き、うまく酸素を取り入れることができずに意識して抑える呼吸。その音すら出さぬようにすればするほど、喉の奥に唾液がたまった。

――嘉弘を、殺したいのだろうか。

もう幾度となく流れる思考に、つっと涙がこぼれた。
「ふっ……」
抑えていた嗚咽がもれる。
気分の高まりが、身を震わせた。
「――そのままさげればことたりるだろうに」
うんざりとしたように、嘉弘が手を伸ばして雪花の両手で支えられる懐剣に触れた。
ぐっと力が更に加えられる。まるで自らを傷つけるように。
強い力に驚愕し、雪花は慌てて懐剣をとりあげようと逆に力を振るう。
嘉弘の胸、わずかばかりの場所で懐剣の先端がふるふると振るえ、雪花は恐怖に首を振った。
「ヤ、やめ……」
「つまらん」
吐息と共に嘉弘の手がはずれ、反動で雪花の体は反対のほうへとはじき出された。
「あなたはっ……死にたいのですか！」
憤りがそう言わせた。
「おまえはオレを殺したいのではないのか」
「……」
静かな問いかけに、雪花は血の気が引くような気がした。
「私は……」

あなたを――
「わかりません」
言葉はぞんがい素直に落ちた。
嘉弘の片眉があがる。
「判らない……」
嘉弘は吐息を落とし、前髪をかきあげると乱暴に雪花の腕を捕らえ、抱き込むようにして床に横になる。
「寝ろ」
「……旦那様？」
「まだ早い――寝ろ、雪花」
寝ろ、と言われても。
他人の腕の中に囚われて眠るなどできようはずがない。
　嘉弘の腕が片手で雪花を抱き、言葉の通りに寝入ろうとする。
どうして良いのか判らず体をこわばらせ、体全体に力が入っていたものの、抱き込んでいる男はやがて寝息をたててしまった。

困惑に眉を潜めながら、雪花はそっと嘉弘の胸に手を当てた。
とくとくと心音が手を通して雪花に流れる。
――あなたは死にたいのですか？
伏せた瞼が二度、ふるえた。

20

柔らかな風が雪花の頬を撫でた。
「植木屋が参りますから」
と、朝にミノが言ったとおり、庭のどこからか木を鋏みで切る音がしている。それは規則正しく枝を切り落としたかと思えば、せわしなくぱちぱちと音をさせていく。雪花は人目に触れるのを嫌うから、植木屋の音が遠いのを確認し、縁側で羽織を縫う。
――花見の日より三日が経過していたが、このところ嘉弘は帰宅していない。ミノなどはまた悪い病がでたと吐息を落とし、慌てて「すぐに雪花さまのもとにおもどりになられますよ」などと余計なことを言う。

嘉弘が戻らぬことは苦痛では無い。
むしろ心が休まる程だが、胸の奥で芽生えたものが時折ふっと掠める。
――嘉弘の心など、考えても仕方の無いことだというのに。
あの男はとうてい雪花にはかれるものでは無い。
心の内など吐露する男でもないのだから。
雪花は吐息を落とし、ふっと視線をあげて驚いた。
縫い取りに没頭しすぎていた為、そこに植木屋の羽織を着たものがいることに気づかなかったのだ。
途端に身がすくむ。
少しは外に慣れた気でいたが、やはり見知らぬものがいるのは心に応える。慌てる雪花に、その男が口を開いた。
「あんた、この間はすまなかった」
「――」
潜められたその声は太く、その眼光は鋭い。

それが先だって雪花を切ろうとした浪人者だと気づいた時、雪花はへたりと腰を抜かしていた。
すとんと腰が後ろに落ちて、片手でもっていざるように下がろうとするのだがうまくいかない。
あえぐように口を開き、二度程大きく息を吸い込んだ。
「安心してくれ、あんたに危害を加えようってんじゃない」
「……なにを」
小さな声が掠れた。
「にがしてやるよ」
その言葉の意味に、更に雪花は驚愕した。
この男は何を言っているのだろう。
町人のような姿に身をやつし、未だ腕に痛みが残るのか右の腕をしきりにさすりながら、男は真剣な様子で切々と語る。
「あんたのことを調べさせてもらったら、あんたも随分と気の毒な人だと知れた。
だから、なぁ――あんたのことを」
逃がす？
何故？
雪花は驚愕のあまりゆるく首を振った。
まったく相手の言葉の意味がつかめない。
逃げる、という言葉の意味が判らない。
何故、逃げなければならないのか。
――自分は逃げなければならないような者だったろうか。
逃げる。
どこへ？

男が少し苛立つように眉をひそめた。
それは純粋な好意であったかもしれない。先日、雪花に傷口を処置してもらったことへの礼であったのかもしれない。自らに情けを掛けてくれた雪花へとむけた同情。

野太い腕が突き出され、雪花の手首を掴む。
「行こう」
その言葉に重ねるように、雪花は悲鳴をあげていた。

逃げる？
どこへ？
――ここより他に行く場所などありはしない。
外など恐ろしくて生きていかれぬ。
人の目が、言葉が、その全てが、怖い。
その恐怖に瞳を見開き、雪花は悲鳴をあげていたのだ。

一気に屋敷のそこらかしこが騒がしくなる。
元よりここは人の多い屋敷。雪花の居る場が最奥であり、最も人の少ないところではあるが、それは逆に袋小路を意味する。
　雪花の腕を掴んだままの男が驚愕に体をこわばらせる。
自ら救いに来た娘が、よもや悲鳴をあげるなど考えてもいなかったのだろう。
ばたばたと足音が近づき、真っ先に男に得物を突きつけたのは道場にいた有村であり、また吉次であった。
「この、慮外者！」
吉次の持つ木刀が男の腕を跳ね上げ、すぐさまその腕の中に怯える雪花を抱きとる。
腰の抜けた雪花は、震える体で吉次に縋りその胸に自らの顔を押し当てた。

外はイヤ。
外など行きたくは無い。
いや――旦那様っ。
必死に吉次に縋り、思い浮かんだその人の姿に雪花は一気に思考を止めた。

「――」
有村の刀が男の首筋にぴたりと当てられる。
「どのようなつもりか、釈明してみますか？」
「……」
「この屋敷で死体が一つ増えようと、誰も気にしませんよ」
有村の静かな声が響く。
男は苦痛のようなうめき声をあげ、雪花は失った思考を取り戻した。
「いえ、いえ……」
掠れる声がようやっと漏れる。
悲鳴をあげた喉は小さく弱々しく、掠れて――それでも確かに辺りにいた者達の耳に届いた。
口を利かぬはずの雪花の、その声が。
「……違うのです」
怖い。怖い。外など行きたくは無い。
何故外になど連れ出そうとするの。
男へと向ける否定的な感情と共に、今ここで言わねばこの男はどうなるのだという切迫したものが胸に触れる。
男に悪意は無かった。
それだけは事実だ。
自分はそれを知っている――たとえそれが雪花を恐怖させたのだとしても。
言葉をあやつる雪花に、皆が一様に驚いていた。そも、彼等を呼び寄せたのは確かに女の悲鳴であった。
ならばそれは雪花の、音。

「雪花や、無理をするでない」
労わるように吉次が言う。
吉次に縋ったまま、雪花はゆるゆると首を振った。
「驚いただけなのです。ただ、知らぬ者の姿に……申し訳ありません」

そう言う体は未だふるえていた。
吉次と有村とが目配せしあい、有村が門弟へと命じる。
「この男を道場へ」
「有村さまっ」
「悪いようには致しません。彼にはきちんと謝りをいれますから」
そう言いつつも、有村は刀を下げて門弟にそっと声を掛け、顎で男を示す。門弟は心得た様子で男を連れる、というよりも引き立てる様相でその場をあとにした。

土足で畳にあがった吉次の残す足跡を有村が処理し、吉次がこの騒ぎに駆けつけたミノに茶を頼んでくれる。
少し温い茶を喉へと通すと、やっと体のこわばりが解けた。
「雪花や」
吉次が柔らかな声音で問う。
「声を聞かせておくれ」
「御前」
「わぁっとる――おまえの声は心気のものだと医者も言うておったからな。きっと驚いた拍子に言葉を取り戻したんじゃろうて。
あの痴れ者は許しがたいが、それは感謝してやっても良い」
嬉しそうな吉次は何の疑いもなく好々爺の顔で言う。
つきりと雪花の心が痛むが、今更――何もいうことなどできない。
雪花は困ったように眉を寄せ、小さな声で口にした。
「吉次、様」
と。
すると吉次が顔をしかめる。
「だめじゃあ」
「御前」
「わしのことはお祖父(じい)さまと言うておくれ。お、ご隠居様も捨てがたいかのぉ。いやいや、何か他にも」
「御前……」

有村が脱力するような声をあげ、ふいに柔らかな眼差しを雪花へと向けてくる。
「無理に喋ろうとなさらなくて良いのですよ。
喉が痛むかもしれない。ゆっくりとで良いのです」
その言葉にほっと息をついてうなずく。
だが、ミノはそれを押しのけるようにして身を寄せた。
「喜ばしいことですよ、雪花さまっ。
きっと旦那様もお喜びになられる」
――その言葉に、ふっと気が重くなった。
もとより嘉弘は雪花の声を、言葉を承知している。

そして、やはり人との会話はとても疲れる。
「指文字が楽であればそれだっていいじゃありませんか。喋れるからと無茶をなさらずとも。私は雪花さんの指文字も好きですよ」
気後れするような雪花の様子に有村が言えば、吉次がちゃかすように口許をゆがめた。
「雪花の手が触れてくれるものなぁ。
この助べえが」
「――どうしてあなたはすぐにそうやって」
二人のじゃれるような会話を耳にしながら、雪花はそっと胸元に触れた。
りん、と鈴が揺れる。

それに触れて、雪花はふっと先ほどの自分を思った。
咄嗟に救いを求めた自分の脳裏を、嘉弘が過ぎったのが……とても苦い。

21

未だ七つ刻、屋敷の主の帰宅に、ミノは上機嫌であった。
籠から身を滑らせ、刀を片手に玄関口に立つ嘉弘に、満面の笑みでミノが言う。
「お喜び下さいませ、旦那様。
雪花さまが言葉を取り戻されました」
家人までもがちいさくざわめく。雪花は静かに頭をたれて刀を受けようとしたのだが、ミノがせっつくように喋るようにとうながす。
――ああ、口など開くものではない。
雪花は暗澹たる気持ちのまま、刀を受け取りながら小さく口を開いた。
「お帰りなさいませ、旦那様」
声が震える。
嘉弘は何を言うでなくその手に大小の刀を預け、その脇を抜ける。
ミノは拍子抜けしたように吐息を落とした。
――それとも、ミノはこの嘉弘が諸手をあげて喜ぶことでも期待したのであろうか。それは無茶というものだが。
嘉弘の私室へと向かい刀を置く、その背にミノの声が届く。
「もうご報告は上がっていると思いますが、昼間のうちに植木屋の――」
「下がれ、ミノ」
「あの、御酒は……」
「要らぬ」
低い威圧的な言葉にミノは吐息を落とし、一礼して下がる。
それを一顧だにせずに、嘉弘は雪花に命じた。
「来い」
「……」

それが何を意味するのか、すでに雪花には判っていた。
自らを鋭く睨む男の眼差しを、怯えを隠すように見つめて小さく息を呑む。
――何故、あの時に咄嗟に嘉弘を思ったのだろうか。
何かの間違いだ。
立ち上がり、ゆるりと近づく雪花の腕を掴んで抱きこまれる。
唇が強く吸われ、そのまま抱かれるものと覚悟を定める雪花に――吐息のように嘉弘がその耳に囁いた。
「出かける、したくせよ」
「……散歩、でございますか？」
半ばうんざりと呟いた。

雪花とて判っている。
あの数日の外出の意味を。散歩などと戯言であるなどということは。
「花見だ」
「……」
言葉と共にもう一度唇が触れる。
「散る桜こそ、美しい」
――背筋にひやりとしたものが走る。雪花は我知らず胸元の懐剣に触れ、それと同時に鈴音が小さく、鳴った。

未だ夕刻よりも少し早い。
嘉弘の言葉に従い外出した雪花だが、かわらず嘉弘の行動の意味はつかめない。
花見、という言葉の通り確かにそこに花はある。
だが、嘉弘が足を向けた先――桜木よりも雪花の気を引いたのは、墓である。
寺の境内の裏手、雪花の前を嘉弘が歩む。
墓場などに縁の無い雪花はほんの少しばかりぞくりと寒気を覚え、

自分の腕を我知らずさすった。
「旦那様……」
心細さにそっと呼べば、やがて嘉弘が足を止めた。
それは見事な枝垂桜――風に枝葉がゆれ、薄桃の花弁が大気にゆれ、散る。
吐息が漏れ、心の時が留まる。
それは確かに見事な。
ただし、桜木の下は墓所。
花の嵐に心を振るわせたものの、墓石の様子に困ったような笑みが自然と浮かんだ。
なんとも嘉弘らしい。
何故かそう思った。

ふと雪花の視線が墓石に落ちる。
まったく知らぬその名の墓を、嘉弘が一瞥している。
「どなたの墓でございます」
「親父だ」
「……名が」
「死んでからも背負う名ではあるまい」
つまらなそうに言うその言葉に、ああそうかと納得する。広く取られたその墓所に、幾つかの墓石が並んでいる。そして一つ、まるきり名の無い墓石を見つけて首をかしげる。
「こちらは？」
小ぶりの小さな墓は、まるで他の墓に隠れるようにひっそりとすえられている。
嘉弘は枝垂桜の枝を一つつまみあげ、まるきりそんなものは興味が無いという様子で口を開いた。
「名も罪もない哀れなものの墓だ」

淡々と言い、息をつく。
「花見だ、花をみろ」
「……」
くっと腕を引かれて嘉弘の腕に抱きこまれる。
身を硬くしても相手の力は強く、仕方なく雪花はその胸に耳を当てた。

とくとくと心音が伝わる。
あたたかな体温が雪花を包む。
花を見ろ、という言葉を思い出し、その腕の中で視線をめぐらせて自らの頭上に咲く桜木を見上げた。
　雪花の動きに、胸元の鈴が音をさせる。
舌打ちが、漏れた。
「……旦那様？」
「耳障りだ」
低い言葉に、それが鈴の音だと気づく。
雪花は小首をかしげ、嘉弘から少しだけ間をあけるようにして鈴に触れた。
「良い音色でございますが」
「……おまえのそれはわざとなのか？」
「は？」
雪花が眉をひそめると、嘉弘が眉間に皺を刻む。
「良い――判っている。
おまえは男の気など少しも頓着せぬ最悪の女子（おなご）だ」
吐き捨てると、更に強く雪花を引き寄せてその唇を塞ぐ。
場は外、しかも墓場という場でのその行為に雪花が焦る。

雪花から酸素を奪い、吐息をさらい、意識さえ奪いつくし、嘉弘は喉の奥を震わせて笑う。
「オレを殺せ、雪花」

砕けそうな腰を、必死に相手の着物にすがって堪える雪花の耳元に、嘉弘は小さく小さく囁く。

「オレを殺せるのは……おまえだけだ」

吐き出される言葉はひどく物騒だというのに、まるで甘いもののように雪花の耳に注がれた。

雪花はぼんやりと滲む瞳に、薄桃色の桜木と青白く光る月を入れ、嘉弘の吐息を感じていた。

――あなたは死にたいのですか。

同じ言葉が胸のうちで木霊する。

問いかけても応えなど無いと承知して、雪花はその腕の中で瞼を伏せた。

――いつか、いつか、この男を殺す日が訪れるのか。

自らの心すら判らないのに。

罪があるのか無いのであるか、それすら判らぬのに。

この男を殺した時に、自分は何を手に入れ、そして失うのだろうか。

雪花はそっと嘉弘を見上げた。

鬼が――笑う。

それはひどく綺麗な鬼が。

誰より不可解で誰より怖ろしい鬼。

――生きて下さいませ。

そっと囁いた。

――私が、討つその時まで……死なずにいて下さいませ。

相手には決して届かぬ囁き。
雪花は迷いを迷いのままに飲み込んだ。
いつか、その時は訪れる。
ならば術(すべ)を求め、この男を見つめ、答えがでるその日まで……

鬼となって生きてゆく。
あの鬼の棲む家で。

春〜了〜

1

春の穏やかな風が夏のそれにゆっくりと変化する。
庭に咲いていた梅がいつの間に散り実を結び、そしてそれが姿を消していた。縁側で縫い物をしているとうっすらと額に汗を感じるようになる初夏。
雪花は横に置いた濡れ手ぬぐいでそっと額の汗をぬぐい、吐息を落とした。
喉に良いというかりん湯はすっかりと冷めていた。日に幾度も女中頭のミノが離れを訪れてはいろいろと話しかけて雪花の口を開かせようとするが、生来のものがそう容易く払拭されることもない。
口を開くのを渋る雪花に、ミノはじれたように「言葉を使わねばまた失ってしまいますよ」などと言うのだが、もともと雪花の言葉は失われていなかったのだから彼女の言葉は正しくは無い。
そのてん有村藤吉などは穏やかに笑みを浮かべ「無理はなさらなくて良いのですよ」と言ってくれるので雪花としても心安い。彼の師範と共にいるときが一番心が穏やかにもなれる。
その気持ちをこめて、雪花は慣れた調子で彼の指に文字を示したものだ。

――有村様はまるで父様のようです。

優しく見守ってくれる第二の父のようだ。
その時にその手元を覗き込んで読解していた吉次は「ぶふっ」と奇妙な音をさせて笑い、有村は一瞬その顔色をなくしたがすぐに微笑を称えた。
穏やかで優しい有村と共にいると雪花は心が安らぎ、自らを許せるのではないかとすら思うのだ。
――この醜き自らを。

縁側で針仕事をしている雪花の手が止まったのは昼を過ぎてからのこと。足をこすりつけるように渡り廊下を歩む音に、吐息が漏れた。

ミノがまた訪れる。

それをわずらわしいと考えるのは雪花の心が狭いのであろうか。

廊下を渡りきり、きちんと膝をついてミノが身を正す気配がする。

その頃には雪花は針から伸びる細い糸をぷつりと糸切り歯で噛み切った。

「失礼いたします」

声がかけられ、以前であれば返事などなくとも――もともと返事など期待できるものではなかった為だが――開いた障子の前、ミノが静かに応えを待ちつづける。

それでも意地でしばらくの間何も告げずにいると、障子の向こうに座るミノがわざとらしくこほんとひとつ小さな咳を落として急き立てる。

雪花は嘆息を隠して小さな声で告げた。

「どうぞ」

「お茶をお持ち致しました」

丁寧に頭を下げてミノは部屋に入り、雪花のそば近くに盆を置き、ついで茶を置いていく。

「浴衣でございますか？　旦那様にようお似合いの藍でございますね」

上機嫌なミノであったが、この手元の浴衣は嘉弘のものでは無い。

有村へと日ごろの感謝を込めて縫い上げているものだがわざわざ訂正するのも馬鹿らしく、極力喋りたくも無い為に放置した。

まずは有村へ、ついで吉次へ、そして最後に気が許せば嘉弘の分も縫い上げようとは思っていたが、その思いは自らでも複雑な色合いを持っていた。

作りたいような、作りたくないような。

できれば作らなくてすめば良いと思うのだが、それならば元より嘉

弘の分など念頭におかねば良いのだ。
　雪花は自らの思想に顔をしかめ、手を伸ばして湯のみを受けた。
「今宵は旦那様もお戻りになられるようですよ」
その言葉に、ぴくりと動きが止まった。
この数日、嘉弘は屋敷に戻っていなかった。勿論、その理由を考えることも無い。どこにいようがそれは嘉弘の勝手であり、雪花にはどうでも良い。
だが、夜にふと胸がざわめくのだ。
――その命のありかを。
　彼の男が、生きて存在しているのかと。
雪花は棚に置かれた絹の包みをちらりと意識した。
　まだ何事かを口にしようとするミノであったが、すぐにその顔に不満そうな色を乗せた。縁側に吉次と有村とが顔を出した為だ。
　時には足音さえさせずに俊敏な動きを見せる吉次だが、わざとのように玉砂利を蹴散らしてその気配を隠すことなく陽気な調子で声をあげた。
「雪花や、茶に――なんだ、もう飲んでおったか」
　吉次は肩をすくめどかりと縁台に腰を落とし、有村は手にある菓子の折りを軽く持ち上げた。見慣れた包みは桃源堂のもので、新作の梅もちを気に入った雪花の為にまた買ってきてくれたのだろう。酸味のあるそれは甘酸っぱく甘いばかりでないところを気に入っている。
　雪花は持っていた湯のみを下げ、畳に軽く手を添えて体の向きをずらして微笑した。
そのまま火鉢の方へと移動しようとするのを見ながら、ミノはふくれっつらでたんっと膝を打って暇(いとま)を告げた。
「ではまたのちほど参ります。御前様、雪花様をあまり疲れさせるようなことはしないで下さいましよ」
　鼻を鳴らして出ていくミノを見送り、吉次は眉間に皺を寄せて不

満そうに鼻を鳴らした。
「まったくあやつの口やかましさは日に日に酷くなる」
雪花はそんな吉次と有村の為に茶の用意をし、微笑んだ。
言葉を操るようになったところでやはり言葉数の少ない雪花だった。
だが、二人は言わずとも雪花の心を察するように示してくれる。とても居心地が良い。
そしてその居心地の良い場は、あの男の手が与えたものだと思えば、雪花は自然瞼を伏せて曖昧な微笑を口元に湛えていた。

2

初夏の入りになると決まって富士より至るものがある。
それは富士の氷室より切り出される氷。
屋敷の蔵のうちほぼ二つ、地下蔵となるそこにその氷は数多収められる。
雪花は最近ではそれを季節の楽しみの一つとしていた。氷が屋敷に届く日は、決まってそれをノミで削り落とし、甘蜜をかけた氷菓子が供される。
幼い頃になど到底口にできなかった贅沢なそれを、はじめて雪花の前に突きつけたのは吉次であった。
両親を亡くした子供はかたくなに身をすくませ、差し出されたものが毒だとでもいうように怯えをみせた。
それを苦笑し吉次が「ほれほれ、溶けてしまうぞ」とせっつけば、有村が嘆息を一つ落としてその氷菓子を手にし、その一掬いをみずからの口に収めた。
「お食べなさい、雪花さん。ほうっておけば溶けてしまう。とても美味しいのですよ」
「――」
口を利かぬ子供はそれでも頑なにぐっと口を噤んでいたが、有村は苦笑と共にもう一掬いを自らの口に収める。
「冬になると池に氷が張るでしょう？　固いそれを大工道具のノミで細かく削り取ったものです。氷だから溶けてしまいますよ」
池の氷という単語に瞳をまたたかせる子供に、有村は微笑んだ。
「いえ、これ自体は富士の山から運ばれたものです。天下様もこの季節には好んで食べるとても美味しいものですよ」
天下様、という言葉にさらに子供は瞳を見開いた。
雪花は元々武家の娘。天下様といえばそれは雲上人たる将軍を示す。そんな尊き方も好むという食べ物など、自分などが食べていいはず

がない。
更に身を強張らせると、吉次が嘆息した。
「まぁいい。今日は食べんでもまた機会はいくらでもある」
ぽんっと頭に手を乗せて笑う老人を前に、雪花は自分の頑なな心を必死に守り続けていた。

「桃源堂の餡子に白玉、甘蜜をたっぷりとかけました」
ミノがうやうやしく運んできた氷菓子に、雪花は古い記憶を呼び起こして淡い微笑を浮かべた。
――はじめてそれを口にしたのは、この屋敷に引き取られて二度目の夏。夏風邪を引いた頃合に、喉が痛く何も食べたくないと口をつぐみ続ける雪花の口に、吉次が珍しく乱暴に口を開かせて匙を押し込んだものだ。
「喉が痛むじゃろ？　これは喉をよく通る。気持ちよかろ？　うまかろう？」
怒ったように言いながら、ついでふにゃりと顔をゆがめた。
「のぅ雪花や。美味いもの栄養のあるものをたんと食べて早よう元気になっておくれ。氷ならいくらでもある。欲しいものがあれば何でも用意してやろうて。意地ばかり張って餓えや下らぬ病などで死ぬなど止めておくれ。水分だけでもきちんととらんと、のぅ、おまえのか細い命が儚くなってしまう」
――鬼の癖に。
幼い雪花は泣きたい気持ちで与えられた氷を口に含んだ。
優しい顔をして、吉次は先々代の山田浅右衛門なのだという。ならば、自分の父を殺した嘉弘とかわらぬ鬼ではないか。
誰も彼も、この屋敷の者は鬼にほかならぬ。
人を殺して血肉をむさぼり生きるもの。
この贅沢な氷だとて、どこの藩で容易く手にいれることができよう。山田浅右衛門であるからこその贅沢ではないか。

言いたいことは山とあった。不満だらけの子供はその全てに蓋をして、口など利くものかとその口を閉ざしていたものを。

盆に置かれた氷菓子二つ。

餡子甘蜜まであわせたその菓子を前に、雪花はちらりと嘉弘をうかがった。

部屋には二人、雪花と嘉弘。ミノは盆を置いて一礼すると、そそくさと部屋を辞してしまっていた。

ミノも二つ用意したところでこの男が甘い氷菓子など受け付けぬだろうに、早く食べねば溶けてしまうと呆れたが、窓辺に片膝をたてて月夜をぼんやりと眺めていた男はふいに手を伸ばして無言でその一つを口にしはじめた。

呆気に取られる雪花に、嘉弘はシャクシャクと食べていく。

今までそのように嘉弘が氷菓子は愚か菓子と名のつくものを食べているのを見たことは無い。そもそも共にいる時間は少なく、床を共にする前は出迎えて刀を受け取り膳を運ぶ時しかこの男と対峙することもなかったのだ。

「なんだ」

雪花の不躾な眼差しに低く声がかかり、雪花はびくりと身をすくませ、咄嗟に「甘味をお召しになられるとは思いませんでした」と率直に言葉を口にしてしまった。

それからその言葉が不躾すぎると慌て、口元に当てた指をぐいと掴まれた。

クっと嘉弘が喉を鳴らし、力まかせに雪花を引き寄せてその唇をふさいだ。

甘蜜の味が口腔に広がり、冷たい舌が雪花の舌の裏をなぞる。

ぞくぞくと背筋を走る悪寒に身を引こうとするが、掴まれた手を支点に固められたように動かなかった。

「甘いか？」
「……」
「私には――苦い。喰らうたびに苦味がはぜる。そうか、おまえにはこれは甘いのだな」
どこがおかしいのか判らない。
喉を震わせて嘲笑う男は、もう片方の手でもって雪花の着物の裾を割った。

嘉弘の体に押さえ込まれながら、雪花はその視界の端に溶ける氷を最後に認め、堕とされる甘い痛みに漏れ出でる喘ぎを必死で堪えた。
「――甘いものなどありはしない……」
雪花の意識が果てる闇、嘉弘の声が嗤いながら囁いた。
「……いがいは」

何がこの男を怒らせたのか、翻弄されるばかりの雪花にそれは判りはしなかった。

3

初夏の入り、昼の間は有村からの稽古を受け、縫い物に興じることが雪花の日々となった。
稽古といったところで相も変わらず刀も木刀すらも手にすることは無い。まるで子供の児戯のようなそれを不満に思うと共に楽しんでいることもまた事実。
雪花が稽古を終えて有村の為の浴衣に何か縫い取りをしようかと思っていたところで、ミノがいつものように現れ、主の帰宅を知らせた。

夕刻、帰宅した屋敷の主である山田浅右衛門嘉弘はいつにも増して不機嫌を隠そうとはしなかった。
大小一対の刀を引き抜き、雪花へと手渡しながら低い声でミノへと命じる。
「明日、倉石家の人間が胴を二つ引き取りに来る」
「承りました」
ミノは一旦息を飲むように吸い込み、ついで静かに応える。雪花は刀をしっかりと抱きながら二人の後に続きつつ、何の話をしているのかといぶかしんだがその場で問いかけるようなことはしなかった。
嘉弘の不機嫌の原因が明日の来客のことであるのか、その来客が引き取りにくるものであるのかと思案したところで雪花に理解できるものではない。
嘉弘の私室にて着替えを手伝い、酒をついだところでおずおずと「明日、私がすることはございますか？」と尋ねたのは過ちであった。
何かの意図があった訳ではなく、ただ、ふいをついてこぼれた言葉。

嘉弘は胡乱に視線を向け、ついで皮肉に口を歪めた。
「奥方気取りか」
「――出すぎたことを致しました」
「良い。そうさな……おまえは知るべきか」
くくっと喉の奥を鳴らし、猪口の酒を一息に喉の奥へと流し込むと嘉弘は手にしていた猪口をたんっと勢いをつけて膳に戻し、その手をすっと雪花の首へと運んだ。
流れるような所作はいっそ優美な程の手際で雪花の首筋をなぞり、ついで底意地の悪い微笑を浮かべ、あまやかな口調でもって囁く。
「見たいか？」
「……何を、でございましょう」
我知らず震える声に、嘉弘はくつくつと喉を鳴らして笑った。
「我が家の蔵、氷室で眠る『胴』だ」
その瞬間、相手の言わんとしているものが何かを雪花は悟った。つっとなぞられる首筋、そして嘉弘の低い声が禍々しく示すもの。――胴、すなわち、首を切り落とされた人の胴体。
今まで漠然と蔵の中身のことを考えぬようにしていたのは、こうして雪花に突きつけるものなどいなかった為だ。
ひっと喉の奥で言葉が凍りつき、ついで雪花は正座で浮かしていた腰をへたりと落とした。
嘉弘の手が膳を払い、邪魔なものをどかして雪花の着物の襟に手をかける。もう片方の手がその首を捉えたまま、心底おかしいというように声をあげて笑ってみせる。
「時折り藩邸の人間が自ら刀を試したいと言うてくる。高い金を払って胴を買い求めるものはまだ良いほうだ。刀に魅せられた馬鹿な連中は、我慢が利かずに辻斬りなんぞに手を染める。まったく、人間とはそら恐ろしいものよな？」
低く囁きながら、嘉弘のもう片方の手が着物の裾を割り、その濡れた唇がほんの触れるか触れぬかの距離を保ちながら首筋を伝い落ちた。

「世の中……人でなしばかりよ」

強く歯を立てられ、身を震わせた雪花を組み敷きながら嘉弘の瞳は――雪花の白い肌に浮かぶ血の道筋に、命の脈動に伏せられた。

＊＊＊

雪花の住まう場は母屋の端、渡り廊下の果てに作られた平屋の二つ間だ。

そして中庭をはさみ、池を挟み、植えられた垣根の向こうに蔵と道場とが並んでいるのが見える。

ぶるりと身をふり、雪花は視界に入った蔵から視線をそらした。

二つが氷室として使われ、ミノが以前に食料が保存できて便利だと言っていたが、その詰められた氷の使い道をはじめて意識し、雪花はこみあげてくるものに口元を押さえ、そのまま縁側で嘔吐した。

蔵に一つの氷。

一つは純粋に氷を保存しているのであろうが、もう一つは保管しなければいけないものが腐らぬようにと使用されている、氷。夏の楽しみとしていたその氷の意味が、ぞわぞわと身を駆け抜ける。

――氷菓子を苦いと言った嘉弘の嘲る笑みがよぎっていた。

「まぁっ」

胃がむかむかとざわつき、食道を逆流した感覚に眦に涙が浮かぶ。胸元に入れた懐紙で口元をおさえながら、突然背後から聞こえたミノの声に慌てて不調法な真似の謝意を口にのせようと振り返ったが、ミノは怒るどころか嬉しそうに手を重ね合わせた。

「いつから気分がすぐれないんです？　月のものはまだでしたね！」

弾んだ言葉に、雪花はミノはいったい何を言っているのかと眉を潜ませた。
「いやですよぉ、早く言って頂かないと！　ああ、きっと旦那さまもお喜びになられますよ。ようございました」
何が喜ばしいのかと更に眉をひそめ、ついで雪花はミノの喜びの意味を理解して青ざめた。

――それは無い。

嘉弘の子など……鬼の子など、いない。
そろりそろりと首を振りながら、しかしいつかその時が訪れるやもしれぬという恐怖に、雪花はふらりと身を崩しそうになった。
嘉弘の子、いつか……自らは鬼の子を、鬼を孕むのか？

このわが身に人を殺める為の鬼が宿るというのか。
それは雪花の意識を闇へとゆっくりとからめとっていった。

4

猫の子が小さな声で切なげに泣いている。
母を求めて、ぬくもりを求めて。
こんな場にどこから入り込んだのだろうかと、雪花は軒下をのぞこうかと思ったが、縁側にあるちいさな籠が目についた。
籠にはこんもりと柔らかな布が入れられ、そしてそれがもぞりと動く。
見てはならぬと本能が示すというのに、雪花の身はそろりそろりとその籠へと吸い寄せられた。
見てはいけない。
それは……――
視界に入り込んだのは赤子だ。未だ小さな赤ん坊。赤ら顔のその赤ん坊は雪花を求めるように小さな手を伸ばしてくる。
雪花は切ないような愛しいような気持ちが浮かび、突き動かされるようにその赤ん坊へと手を伸ばしかけたが、その赤ん坊の口から鋭い牙のようなものがのぞき、ついでその額にはっきりとある異形のしるし――いびつに飛び出した白い角に、悲鳴をあげた。
鬼、鬼だ。
あれは鬼の子――あれは……

慌てて抗うようにあばれる雪花の体を押さえ込むように、ミノの声が耳に入り込んだ。
「雪花様、雪花様？　ああ、がっかりとなさっておいでなのですね。申し訳ありません。ミノの早合点で――いえいえ、流産などではありませんからね。まだ赤様はいらっしゃらなかったんですよ。だからそんなに悲しまれないで下さいまし」
ミノの切々と侘びる言葉を耳にいれながら、雪花は自分が離れに

ある自らの居室で寝かされていることに気づいた。
その額を汗が伝い落ちるのを、ミノがやんわりと塗れた手ぬぐいでぬぐってくれる。だが、それを思い切り跳ね除けたい衝動と同時、何もかもがおっくうなような気だるさが体にあった。
耳の奥をどくどくと脈打つものを感じる。
鬼など生まれはしない。生まれてくるのはただの赤子だ。
だがやがて、それは鬼へと変化していくに違いない。山田浅右衛門の血を引き、その仕事を継ぐべくして育て上げられる。
首切り浅の、子。
鬼の子として。

何くれと世話を焼こうとするミノに、かすれるような声で「一人に、して」と言葉を搾りだそうとしたものの、音は言葉にならなかった。それでもミノは悲しそうに一つうなずいて姿勢を正すと、深々とたたみにこすりつけるかのように頭を下げた。
「ごゆっくりとお休み下さいませ」
ミノは完全に赤ん坊がいないということに対して雪花が気落ちしているのだと勘違いしているのだろう。だが、真実は違う。
――雪花は、やがて自分の身に嘉弘の子ができるかもしれないなどと考えたことは無かった。
今となっては雪花も初心な小娘ではない。
嘉弘に抱かれる妾でしかない自分だ。子種といわれるものがどういったものであり、女に子種を授けるということがどんなものであるのかもよく知っている。
屋敷を留守にすることも多い嘉弘だが、屋敷で寝る時は決まって雪花の体を好きにし、雪花の体に種を撒き散らす。
そう、ならば当然いつかは雪花の身に嘉弘の子が宿ることもあるのだ。

それを思い、雪花は身震いして自分の体を抱きしめた。
――今なら、今ならまだ大丈夫。
今であれば、嘉弘の子が宿っていない今であれば大丈夫だ。

雪花はぎゅっと自らを強く強く抱きしめ、棚に置かれた懐剣へと狂おしい程の眼差しを向けた。
嘉弘を憎んでいるのか殺したいのかは判らない。
だが、ただ一つきちんと理解していることがある。

自分の腹から生まれる赤子が――やがて鬼になるなどと自分には耐えられそうにない。
生れ落ちたその時から、鬼の道を歩むことを定められるのであれば……そのような子を生むなど耐えられない。

雪花はつっと流れ落ちる涙を感じながら、気が触れたように笑みをこぼした。
早く、一刻も早く……嘉弘を殺してしまわなければならない。
鬼の子を宿す前に。

5

絹の包みからそっと引き抜いた懐剣の重みに、安堵するように吐息が漏れた。

むかし、遠い昔――これとは違う懐剣を雪花は手にしたことがある。

母から手渡されたそれは、守り刀であった。

十になろうかという娘に武家の娘としての生き様と守り刀を渡して厳しい口調で諭した母のことを思い出し、現状の自分を母が見たらどう思うのであろうかと視線が落ちた。

武家の娘として、辱めを受けて生きながらえることなかれ。

そう言われたことなど彼方に忘れ去り、雪花の現状は――父の命を奪い去った浪人者の妾という立場。

屋敷の離れに囲われ、その身を差し出す日々を甘受している現状を、母であれば嘆くことだろう。

何故、自分は生きているのだろうか。

父も、母も、もうこの世にないというのに。

「雪花さん」

暗い思考の海に沈んでいた雪花は、突如掛けられた言葉にびくりと身をすくませた。

膝の上で抱く懐剣を、あわてて押さえるように視線を上げれば見慣れた師範が縁側から微笑んでいた。

稽古の時間をうっかりと失念していた雪花は、あわてて立ち上がり膝に置いた懐剣が足元にころりと転がる。

動揺しながらそれを拾い上げようと手を伸ばせば、それより先に有村が懐剣を手にしていた。

「驚かせてしまうつもりは無かったのですが、すみません」
――いいえ、こちらこそ申し訳ありません。
そう、言葉を口にしようとして雪花は息を飲み込んだ。喉の奥が引きつれ、かすれた僅かな音だけが不快に耳をなぞる。
軽く見開いた視線の先、有村は労わるように瞳を細め「無理に言葉を操らなくともよいのですよ」とひとつ頷いて見せた。

胸元に当てた手が、とくとくと早鐘をうつ心音を伝える。
本当に言葉を失ってしまったのかという思いが漣（さざなみ）のように胸を浸していくのを感じながら、雪花はゆっくりと手を喉許へと移動し、小さな声で「まさか」と囁き、自らが音を失った訳ではなく、ただ喉を痛めているだけだと知ると安堵した。

いつか鬼の子を孕むのではないかと悪夢に目を覚まし、幾度も幾度も吐き戻したことで喉を痛めたのだろう。
小さく息をついた雪花へ懐剣を差し出し、有村は「本日の稽古はお休みにして――久しぶりに散歩にでも参りましょうか」と誘いを掛けた。
「本日はお社で市がたっているようですからね」
ふと思い出すように有村は手を差し出しながら口にした。

「夏も入り、今宵は両国の川開きだ」

気の沈む雪花を元気つけようとでも言うのだろう。その優しさに雪花はつきりと胸が痛むのを感じた。
「当代も今宵は戻らぬでしょうから、花見の時のように船でも仕立てましょうか」
――両国の川開きといえば、墨田の川で催される花火を示す。もともとは大飢饉により多くの人々が命を落とし、それを慰める為には

じまった夏の催しだ。
春先の花見同様、人々はこの日を楽しみにしている。
昨年も、雪花はこの屋敷の離れの縁側で夜空に広がる大輪の花々を溜息交じりに眺めたものだ。

船を仕立てようかと提案する有村の言葉に、雪花はそっと首を振った。
贅沢が過ぎる遊びより、また今年も昨年と同じようにこの縁側で見ればよい。喉の痛みに甘え、慣れた指文字で示せば有村は苦笑した。
「ただの気晴らしですよ。この程度で懐具合を心配されたと思われるのは寂しいものですね――これでも山田一門の師範の一人ですよ」
山田一門といったところで身分は浪人でしかない。
確かにこの山田浅右衛門の屋敷は広大であるし、見たこともない贅沢で埋め尽くされている。
そう、夏だというのに冷たい氷を惜しげもなく使うことのできる家。
それでも未だにその財力を理解しない雪花に、有村は縁側から庭先へと連れ出しながら囁いた。

「山田浅右衛門と町奉行でしたらどちらが偉いと思いますか？」
――そんな判りきったことを言う有村に、雪花は意味がつかめずに眉を潜め、唇の形だけで「お奉行様」と答える。
それに満足そうに有村は頷き、
「町奉行の石高は三千石――山田浅右衛門の石高は三万石になります。山田の師範代を勤める私も、相応の石高を頂いておりますよ」
まるで悪戯を暴露するかのようにこそりと囁いた。

「へたな大名など足元にも及ばない。それが山田浅右衛門です」
続けながら、有村は口調を変えた。
「それゆえに、要らぬ恨みも買いやすい」

ことりと落ちたその言葉は、雪花の胸にずしりと落ちた。
――この自らの胸にある恨みを、有村は気づいているのだろうか。
山田浅右衛門嘉弘へと向ける雪花の思いを。
自らでもうまく消化することもできずに蟠り続けるこの気持ちを。

父を殺されたと恨んだものが、やがては自らを苛むことへの恨みに変わり、今は――今は。
ただ、恐ろしいのだと。
自ら産み落とすやも知れぬ子が、やがて山田浅右衛門となりて人を殺す鬼となることが恐ろしいのだと。
心優しき貴方を踏みにじり、武術を教えて欲しいと願うこの気持ちが、ただの私怨でまみれていると貴方は気づいているのであろうか。

自らの手を引き、導いてくれるその人の横顔を見つめ、雪花はふとそれまで考えてもいなかったことに思い当たり、息をつめ、足を止めた。

「雪花さん？」

――あなたは、私があの男の妾であると……あの男に抱かれているのだと、

「どうかしましたか？」

そう、知らぬ筈は無い。
何も知らないなどとはありえない。
その事実に、雪花は引き連れるような笑いをこぼしてしまいそうな

自分を留めた。
それまで考えたことも無かった。否、考えたくも無かった――有村も、吉次も、全てを承知しているに違いない。
気づいた途端に身が振るえ、つないだ手からそれを感じ取る有村は心配気に雪花を覗き込む。

「久しぶりに外に出るのは、やはり恐ろしいですか？」

ああ、貴方も――私が鬼の子を産むことを望んでいるのですか？
そう問いかけることなど、到底できそうにはない。
つないだ手とは反対の手が、自然と帯留めの辺りでこぶしを握り、その手が小さくまろい鈴に触れた。

愛らしい鈴が、小さく悲しく、りんと鳴る。

6

夏の肌にまとわりつくような暑さにうっすらと汗をかきながら散歩から帰宅した雪花をまっていたのは、顔をしかめたミノであった。

散歩の途中、顔色を白くした雪花を有村は近くの池へと誘い、その木陰で涼をとりながら少しばかり時間を過ごしてしまった。

はじめのうちこそ様々な思いに胸がつぶれるような気持ちを味わっていたものの、気を遣う有村に雪花は精一杯微笑を浮かべて見せようと応えた。

そんな二人が普段と同じように正門より足を踏み入れた途端、そこを掃き清めていた下女のおぬいがまるでお化けでも見たとでもいうように弾けるように体をそらし、慌てて屋敷奥へと声を荒げたのだ。

「ミノさんっ。雪花様がお帰りになられましたっ」

今まで幾度か散歩に出たことはあるものの、このように大声でその帰宅を吹聴されたことはなく、驚愕した雪花が一歩後ずさり思わず有村の背に隠れようとしたところで、女中頭のミノが珍しく足音も高く正面玄関を訪れた。

「どちらまで行かれていたのですかっ」

眉を潜め、棘ばかりを含ませた台詞に、

「すみません。今日は稽古のかわりに散歩に――市で大福を買いましたよ。如何です？」

苦笑交じりに有村が言えば、ミノはきつい眼差しで有村を睨みつけた。

「旦那様が許されているから、ミノが言うことではありませんが。ミノは雪花様の稽古だとて反対なのですよ」

敵意すらむき出しで叩きつけられる言葉は本来では珍しい。そして、それに対する有村でさえ、平素であればにこやかに対処するで

あろうに、このときばかりは様子が違っていた。
「言うことで無いと理解なさっているのであれば、黙ってらっしゃればいい」
有村らしからぬ辛らつな台詞に、雪花は驚いて一歩前に立つ有村をみあげていた。
近くにいた下男下女までが思わず身をすくませるが、しかしミノは眉間に皺を刻ませ、ふんっと鼻を鳴らしてみせた。

「とにかく、雪花様。旦那様がお戻りです。早く帰宅のご挨拶をなさってくださいませ」

ぴしゃりと言葉を続けられ、雪花は狼狽した。
本日は両国の川開きだと有村が言っていた言葉がよぎる。その日は夜空に大輪の菊花のような美しい花火が打ち上げられる夏一番の催しといってよい。
そんな日に嘉弘が屋敷に戻ることなど滅多にあることでは無かった。
有村自身も嘉弘が今日この日に帰宅するとは考えていなかったのだろう、雪花を振り返り、困惑するように苦笑を落とした。
「当代が戻るような刻限まで連れまわしてしまいましたね。お疲れではありませんか？」
「雪花様おはやくっ」
急かすミノの言葉に、雪花は慌てて玄関をあがろうとし、有村は履物を脱ぐ為に雪花の手を支えてやりながら小さな――ほんの小さな声で囁いた。

「約束を違えてしまいますね、すみません」

その言葉に、雪花は未だ引き連れるような声を何とか駆使し、相手に届くかどうかすら判らない小さな囁きで返した。

「お気になさらないで下さい」
――今宵、離れで吉次を誘い花火を楽しもうという約束がちらりとよぎり、残念な思いがじわりと雪花の胸に滲んだ。
本来であれば、尋ねたいことならばある。
けれどそれを口にしてどうだというのだろうか。
触れずにいてくれる優しさに――雪花は瞳を伏せて甘えることを選んだ。
そう、たとえ相手の全てが善でないとして、いったい何ほどのことがあろうか。自らだとて到底善なる生き物ではないというのに、相手にそれを求めることなど愚かしい。
――表面上のこととといえど、誰より自らを気遣ってくれるのは有村と、そして吉次に他ならない。
その二人さえ鬼だ悪だと決め付けて、それでどう生きていけようか。

雪花は淡い微笑でその場を辞し、急かすミノに追い立てられるようにして屋敷の奥にある義弘の私室の前で膝をついた。
廊下、板の間にすわり、閉ざされている襖を軽く両手の先を揃えて少しばかり開き、ついで間をおいてすらりと開く。
本来であれば声をかけるのであろうが、雪花はもともと口を利かぬ時からの慣れでその一連の動作を無言で通す。
後に続くミノは良い顔をしないが、ミノは近頃では嘉弘の前で雪花を叱責したりはしなくなっていた。
「――ただいま、戻りました」
引きつる喉を駆使して小さく告げてゆるりと視線をあげると、そこにいたのは雪花の良く知る着流し姿に片膝をたてて座る嘉弘である。
部屋の縁側近くにすわり、朱塗りの盆に酒と肴――寛ぐ時にそう

するように、今は髪すら結い上げずにちらりと横目で雪花を見た。
「具合は……」
もともと口数の少ない嘉弘だが、ふいにそんなふうに口を開く。雪花がきょとりと瞳を瞬くと、嘉弘は苦いものでも口にしたかのように口元を引きつらせ、忌々しいという様子で視線を流し、庭へと向けた。
部屋には虫避けの菊線香の香りがくゆり、雪花の鼻腔に触れる。
「具合はもうよさそうだな。外出できる程になったのであれば」
平坦に言われる言葉に、まさか相手が自分の身を案じていたのかと雪花は眉を寄せた。

「旦那様、有村様に言ってくださいませ。未だ病み上がりだというのに外にお連れになられるなんて」
ミノが嘉弘に向けて口を開くが、嘉弘は親指と中指とではさんでいた小さな猪口をくいっと呑みきると、無言で雪花へと差し向けた。

そうされるといつもの常で、雪花は嘉弘の許へと近づき猪口を酒で満たす。
その二人の様子に満足するように、ミノはとんっと膝を叩いた。
「今夜は天気もよろしいですし、きっと素晴らしい花火があがりましょう。楽しみでございますね」
言いながらミノが部屋を出て行くと、途端に二人の間には沈黙が満ちた。
それは普段通り――これといって会話がある訳ではない二人だ。

嘉弘は酒を呑み、そして雪花は無言でそれを注ぐ。
ただぼんやりと外を眺めている嘉弘が、なんだかやけに憎らしく思えて雪花はどんどんと不機嫌が蓄積していくのを感じていた。
二杯、三杯と酒は嘉弘の口へと消えていく。
たかが二杯の酒で頭が霞む覚えを抱く雪花にとって、嘉弘は信じら

れない程の大酒のみだ。この面前の男が酔うということはありえるのだろうか。

そして、酔ったその時は――この恐ろしい鬼でさえも容易く命を脅かされたりするのであろうか。

そう考えた時、まるで自分が勧めるこの酒が――毒酒にでもなったかのように震えが走り抜けた。

「どうした」

まるでその考えを見透かすようにふいに言われ、危うく雪花の手の徳利が大きく震える。

そう、もちろんこれは毒では無い。ただの酒だ。

だが、この酒を多く召した後――酔いつぶれてしまった男を殺すことは、容易いのではないだろうか。

雪花は何故か気持ちが大きくなるような、笑いたいような気持ちでその視線をあげ、挑むように嘉弘を見返した。

「御酒は、いかがでございますか」

その眼差しを受けた男は、すっと切れ長の眼差しを更に細く瞳孔すら細め、口元に笑みを浮かべて見せた。

二人の奇妙な緊迫した視線が絡み合い、嘉弘の喉が小さな音をさせ――

嘉弘は無言で杯を示した。

7

徳利で三つ。
純粋に嘉弘の腹へと消えた酒量に雪花は息をついた。
雪花が帰宅の挨拶に顔を出した当初は、部屋にはほのかに虫避け用にと菊線香が焚かれ、その香りが満ちていたものだ。
だが半刻足らずも過ごせば、その香りが鼻をくすぐることも無い。
酒の肴として並べられた焼き魚や煮物の香りをも打ち消す程の酒臭が満ちる。
だというのに、縁側、障子の縁に背を預けて片膝をたてて黙々と酒を飲む男は、相も変わらず涼しい顔をさらして酒を喉の奥へと流し込んだ。
以前吉次が酒を召した時は、その頬を赤く染めて口元はいつもよりも緩んでいたものだ。
だが、嘉弘は当初と変わらず酒をくいくいと干していく。
その酒に毒は無く、その酒精にすら酔いを示さぬ男の様子に雪花の唇から吐息が落ちた。
――嘉弘の口の端がゆがむ。
「どうした、酒が尽きたか？」
障子の枠に背を預け、縁側に片足を投げ出して座る嘉弘が口の端を持ち上げて意味ありげに笑う。
まるで雪花の心内など全て見透かしているという相手の様子に、雪花は唇を噛み、軽く腰をあげて転がる徳利を丸盆へと移し、無言のままに身を起こした。
――途端、その腕がつかまれ、引かれ、ガシャリと徳利が音をさせる中、雪花の体が嘉弘の腕に囚われる。
短い悲鳴は未だかすれ、逃れようともがいたその時にひゅっとい

う奇妙な音が耳にかするように届いた。

一拍音が失われたものの、ドンっと低く地すら揺るがす重い音が全てをさらい、闇夜を照らす光量が満ちたのを皮切りに、幾つもの閃光が星すら攫い夜空を染め上げた。

片膝を立てた姿で座る男に背後から抱かれる形で、雪花は空に広がる色彩に心を奪われた。

花火の開始を知らしめるように、続けて三発の花火が打ちあがる。いくつかあるという花火を生業とする者達が毎年その美しさ、大きさを競う為に年々その催しの規模は自然と大きくなっていく。

まるで巨大な太鼓を力強く鳴らすかのように響く花火の音に身をすくませつつも、その美しさに雪花は嘉弘の腕の中にいるということすら忘れ、感嘆の溜息を零した。

「別にはじめてではあるまいに」

耳元で囁く言葉に、はじめて嘉弘に抱きすくめられていることが体をなぞり上げ、雪花は狼狽した。

嘉弘の囁きが雪花の産毛を揺らし、その手がするりと胸元に忍び込み、刀を扱う硬い指先が乳房に触れる感触に雪花の血の気が一息に下がった。

――ぶわりと心を占めたのは、赤子の姿。

額にこんもりと盛り上がる異形の角を持つ、鬼の赤子。

やがて大きくなるその暁には、誰より恐ろしい人を殺す悪鬼となるべく子供。

「や……っ」

雪花はひゅぅと喉から掠れる音をだし、相手の腕から逃れようと宙をかいた。

打ち上げられる花火も、音も――届かぬ程に恐ろしき思いが全身を満たし、雪花は傍らにある漆膳を掴み取り、それをがしゃりと倒し

ながらもがいた。
「どうした。これも慣れたものだろうに」
冷ややかに言う男の腕が強く雪花を引き戻す力に、雪花は胸元の手を退けようと手を走らせ、その指が――絹袋に包まれた懐剣を引き抜いた。
「鬼などっ、人を殺す子など産みたくないっ」
悲痛な叫びで首をふり、幾度も手許を危うくしながら引き抜いた懐剣の白刃が向いたのは――雪花自身の首筋であった。
その時、雪花の思考はきちんと定められたものではなかっただろう。ただ、本能のままに、相手が憎いのではなく、ただひたすらに――やがて産まれる筈のわが子を山田浅右衛門にしない為に自らができることとして刃が向いた。
これで良いのだ。
武家の娘として、こうして自ら命をたつことが。
もとよりこうするべきであったのだと。
その安堵感と気持ちの高まりに、雪花は懐剣に力を込めるその瞬間、ふわりと微笑を浮かべてみせた。
大飢饉の折に失われた幾多の命を慰める為の花火が打ち上げられるその下で、雪花の懐剣が彼女自身を捕らえる寸前、嘉弘は転がる徳利を彼女の腕へと投げつけ、驚愕に生まれた隙を突いてその手首を捉えていた。
「阿呆が」
忌々しいとばかりに吐き出される言葉は舌打ちに混じり、嘉弘はすばやく懐剣を遠く投げ捨てると雪花をその場で組み敷き、その頬を打ちつけた。
「おまえが産む子が俺の跡を継ぐなどと、浅慮なことだな」

吐き捨てられた言葉と、じりじりと痛みを訴える頬に雪花は瞳を見開いた。
「安堵するがいい――おまえの産み落とす子が山田浅右衛門を名乗ることなど、何があろうと、ありはしない」
傷口にゆっくりと浸み込ませるかのように落とされる言葉。
自分の上に圧し掛かる男の背後に、大輪の菊の花を見ながら雪花はその言葉をどこか遠く聞いていた。

自ら産み落とす筈の子が山田浅右衛門を名乗ることはない。

安堵できる言葉であるはずだ。
安堵できる言葉であるはずだというのに、雪花は自らのうちのどこか深い場所に小さな棘を突き立てられたかのような痛みが走るように感じていた。

1

庭木の手入れの為に植木屋が入るとミノがそっけなく口にしていた通り、本日は中庭の中をぱちりぱちりと鋏の音が規則正しく聞こえてくる。

以前一度おかしな男が入り込んだことがあり、以来出入りの植木屋は顔を変え、そして決して無断で庭にある池を挟む橋は渡ること無きようにといい含められている。

雪花は離れの自室の雪見窓にもたれるように吐息を落とした。

ミノが雪花に冷たい態度をとるのは判りやすい。

屋敷の主である山田浅右衛門の帰宅が遠のいている為と、雪花自身に懐妊の兆候が見られない為だった。

――一刻も早く跡継ぎ様を。

そう急かすミノを、雪花はどこか覚めた心持で眺めることしかできない。

何故なら、雪花の産み落とす子は決して跡継ぎになどならぬのだから。

所詮妾腹。

もとより判りやすいことだ。雪花の役割といえば、ただ山田浅右衛門嘉弘の慰み者でしかない。

だが、そんなことで自らは傷ついているのだろうか。

この気だるさは。この――引き連れるような思いは。

夏のあの夜の出来事は、到底忘れることなどできずに雪花の内に淀みとなって残された。

自らの子が山田浅右衛門になることは無い。

人を殺す悪鬼などになりはしない。

――喜ばしいことがらではないか。

幾度も吐くほど、悪夢に苛まされるほどにつらい未来などないのだと、安堵すべきことだというのに。

あの晩以来、嘉弘はいっそう酷く雪花を抱くようになった。
雪花の体に跡が残るような程、その骨も肉すら押しつぶすように。
だがこの一月ほど、嘉弘はぱたりと雪花のことなど忘れたように屋敷に戻らぬ日々を過ごし、雪花自身――身の置き所のない日々に吐息を曇らせていた。

「おや、これはすまないな」
ふいの声に、雪花はびくりと身をすくませた。
突然向けられた言葉は、縁側より向けられたものだ。
また庭師が――もしくは庭師に化けたものが迷い込んだかと思われたが、そこにいたのは黒い袈裟姿に笠をのせ、錫杖とを握った坊主である。
死の匂いの色濃いこの屋敷であるが、雪花が坊主を見かけることなど滅多にない。
慌てふためき、だが声こそあげずに雪花は身を正した。
「あの、どちら様で……」
「坊主だ」
見たままの言葉を返し、坊主はくいと笠を片手で軽く持ち上げると、皺の寄る目元を和ませて口に笑みを浮かべた。
「すまんがつかれた、茶をくれ」
戸惑いこそしたものの、雪花はぎこちなく笑みを浮かべてこくりとひとつうなずいて見せた。
母屋に用向きのある者がまぎれたのかも知れぬと自分を落ち着かせ、乞われたままに茶の用意を整えた。
急須に茶筒の茶を落とし、火鉢に乗せた鉄瓶の湯を入れていく。
途端にほわりと香る茶の香りに坊主は目を細めた。
「良い葉を使っているな。なに気にするな、なにせ生臭坊主――酒だとて飲む」
カカと笑いながら雪花が示す茶を慎重にそろそろと飲む様などは、どこか子供のようだ。坊主は錫杖と笠とを縁側に並べ、自らも縁側

に腰を落ち着けて雪花の部屋を瞳を細めて眺め回した。
「ここは長いのか？」
「――かれこれ、五年近く」
「まだ年若いように見えるがな。まぁいい――それにしてもおかしなことよ。俺が呼ばれたのは……いやいや、うむ。すまなんだ」
坊主は一人で喋り、一人で納得したかのようにうなずいてみせる。
「ここの者はよくしてくれるか？　主はどうだ？」
遠慮ない言葉に、雪花は体を強張らせた。
「まぁ、主はあの嘉弘なのだからあまり期待はできぬか。何よりあれは口が少ない。無愛想でなぁ。目つきも悪い。あれはおそらく祖父似なのだろう」
笑いながら言う坊主の言葉に、雪花は納得のいかぬものを感じた。嘉弘の祖父といえば、吉次のことだろう。
吉次は確かに時折その眼差しを鋭くすることもあるが、それは稽古の上のこと。普段はといえば、好々爺の眼差しで雪花に菓子を勧め、そしてその口から落とされる言葉は柔らかく無愛想などとは思われぬ。
何かつじつまの合わぬ奇妙な思いを抱いていれば、いつもと同じように庭の玉砂利を蹴るようにした足音が届き、表庭とを仕切る丈の低い小さな押し戸を開いて吉次が顔を出した。
「……なんだ、縁起の悪いのがおるな」
「挨拶より先にそれですか」
「お前が尋ねて来て良いことがあったかな。どうせ金の無心じゃろ。さっさとミノを捕まえて金を持っていけばいいものを。何を悠長に茶など飲んでいる」
嫌そうに言いながら、吉次はどかりと縁側に腰を落とした。
「金の無心は勿論ですが。今回ばかりは話が違う。嘉弘に呼ばれたのですよ」
先ほどまでの口調とかわり、吉次相手では礼節を思い出すようだ。坊主は開いていた足までも心持ち閉ざし、言葉を操る。

「あやつに？　いまさらお前などに何の用があるんだか――雪花や。すまなんだが、厨に行ってそば粉をもらって来てくれんか？　そばがきが食いとうなった」

吉次の為に茶の用意をしていた雪花は、突然の言葉に戸惑いはしたもののこくりとうなずき場を退いた。

――あれが嘉弘の嫁ですか。

ぱたりと障子を閉ざして身を翻した途端、部屋から漏れ聞こえた言葉に雪花は唇を噛んで足を速めた。

吉次が返す言葉など、聞きたくはなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8299j/

鬼の棲む家

2011年10月28日12時07分発行